SPEC magazine

戸田恵梨香
加瀬 亮

特集:
最終回は どうなるのか?

堤 幸彦
植田博樹
THE RICECOOKERS

福田沙紀
城田 優
神木隆之介
有村架純

WARNING

SPEC magazine

トリセツ

本書は、
TBS系ドラマ「SPEC～警視庁公安部第五課未詳事件特別対策係事件簿」
（毎週金曜午後10時～／2010年10月8日～12月17日・全10回）
を追ったものであります。

本書は、
第8話（12月3日放送）の翌日、12月4日に発行されました。
よって、第1話～第8話までのいわゆる“ネタばれ”を含んでおり、
これから「SPEC」をお楽しみいただく方には、注意が必要な本となっております。
編集部としては、8話までの観賞後にお読みいただくことをお勧めします。
尚、第9話（12月10日放送）・第10話＝最終話（12月17日）放送の内容に関しては、
ヒント・予測はあっても、いわゆる“ネタばれ”は含んでいないので
安心してお読みください。

また、
最終回終了後に読んでいただいても楽しんでいただけるように、編集してあります。
では、「SPEC magazine」のはじまりです。
最後までお付き合いください。

SPEC magazine
CONTENTS

COVER
Naoki Tsuruta : photo
Yumiko Sagawa : styling
Keiko Yamashita : hair-make

BACK COVER
Yoshihito Sasaguchi : photo
Yuta Kaji : styling
Yasushi Miyata : hair-make

場面写真撮影:
黒田光一
藤田政明(P68)
TBS提供(P46-51,P78-83)

人間の脳は

通常10％ほどしか
使われていません。
残り90％がなぜ、存在し、
どんな能力が
秘められているのか
まだわかってないんです。

unknown SPEC

私たちは、まだ、本当の「SPEC」を知らない

戸田恵梨香

todaerika/toumasaya

当麻紗綾

左手には包帯、赤いキャリーバッグをいつも引きづり、
餃子をバクバク食べる女。頭脳は明晰で、事件は「頂きました」とすぐに解決。
しかし、いま、最終決戦のときを迎えようとしている。当麻は、どうする?

Naoki Tsuruta : photo Yumiko Segawa : styling Keiko Yamashita : hair-make

一（ニノマエ）に対しては、復讐心しかない、と想う。

Junya Uesugi:text

左手が、落ちていた。彼女の目の前に左手が――。その薬指には幸せの象徴である婚約指輪が……。そのとき、彼女の中で何かが爆ぜる音がした。
「左手をなくしたことで人としても女性としても、心の中のいちばん大切なものが損なわれた感じなのかなと。自分に関わっている人たち全員に迷惑がかかると思って、人間らしい心の交流を遮断してしまった。彼女にとっては相当辛かったんじゃないでしょうか」
戸田恵梨香はヒロイン・当麻紗綾の、あのときの心情をこう察する。そう、恋人だった地居聖から突然のプロポーズを受けたときの当麻はどこにでもいる普通の女性だった。この事件に遭遇するまでは――。
「メークもして、素敵だなって思うようなファッションスタイルをして、自分の女性度を上げてデートする。本当に普通の可愛らしい女性だったんです。でも、その一方で、犯人や犯罪に対して、"絶対に許さない"っていう強い意思はもともと持ってたんじゃないでしょうか」
当麻のこの過去は、いわば"シーズン１"。そこから"ジーズン２"とも言うべき本編が始まる。そう、今やすっかりお馴染みとなった、あのキャラで当麻は我々の前に初めて姿を現した。戸田の卓越した演技力が当麻に生命を吹き込んだことは言うまでもないが、メインディレクター・堤幸彦の手腕も見逃せないところだ。堤は言う、"戸田さんのファンではない、スケベな中年の男の目線で当麻というキャラクターを造形しました"と。
「それが良かったんだと思います。それが愛嬌になってるんですね。私が客観的にこの当麻という女性を見ても、やっぱり可愛いんですよ。いろんな表情をするユニークな女の子で、こんな人近くにいたらきっと楽しいだろうなって。反面、振り回されるだろうなとも思うんですが、私はものすごく愛されるべきキャラクターなんじゃないかと。それはやっぱり堤さんが作ってくれたキャラだと思いますから、本当に感謝しています」
こんな当麻が変わっていく。だが、それは成長ではなく彼女の本質。かつての当麻がそうだったに違いない、人間らしさを次第に取り戻していく。
「けっこう当麻って物事を客観視します。そんな彼女が、相手に入り込みやすい瀬文焚流の背中を見て、彼に対するある種の思いみたいなものが生まれてきたんですよね。それが大きかったんじゃないのかなって」
封印が解かれたものがあれば、依然、心の奥底で静かに、そして激しく燃やし続けている感情もある。そう、それは左手を失うことになった因縁の相手・一　十一（ニノマエジュウイチ）への敵意、そして憎しみだ。
「もう、一（ニノマエ）に対しては、絶対に捕まえてやろうっていう復讐心みたいなものしかないんじゃないかと。でも、相手も"君が僕の家族を皆殺しにしたんじゃないか"的なことを当麻に言ってますよね。これはいったいどういうことなんだろうと。だから、その真実を知るまでは一（ニノマエ）のことはずっと憎んでいると思います」

これからどうしていけばいいのか、今はそう思ってます。

その宿敵は時間を止める究極のSPECの持ち主だ。当麻が勝つには、やはり何らかのSPEC能力を開花させる以外にまず、ない。

「確かに、当麻も同じようなSPECを持ってないと対等に戦えないし、勝てないと思うんです。だけど私は、当麻には凡人であってほしいんです。凡人じゃないと、じゃあいったい今までの話は何だったの？　って。凡人だからこそ、当麻の今の天才的な部分がカッコイイと思うし、何より普通の人間が持つ知能や智恵で、SPECの持ち主に勝ってほしいんです。でも、彼女のズバ抜けた記憶力や洞察力とかも十分にSPECですけど（笑）」

だが、敵はまだいる。当麻、いや未詳そのものが、いよいよ湧き出てきた魑魅魍魎たちと運命的に対峙することに。SPEC HOLDERの抹殺を目指す、津田助広率いる公安の特務班、何やら動き出したSPEC HOLDERの組織。そして一（ニノマエ）と関わる謎の青年——しかも彼は記憶を書き換えられるSPECの持ち主だ——も、風雲急を告げる舞台に登場してきた。この切迫した状況の中、当麻が頼れるのはやはりあの男しか、ない。

「当麻も瀬文も目的は一緒で、とにかく事件を解決させたい、真相を知りたい——同じ処を目指す同士なんですよね。すでに５話の段階であの二人の信頼関係は100％築かれたと思っていますし。だからこそ、警察を裏切るような行為に走った瀬文に対して“頼ってください”って言えたんです」

さらに戸田は“この言葉が正しいのかが分からないんですが……”と前置きして、こう言葉を続けた。

「何となく、瀬文に対して同情のような気持ちがあるのかなと思っていて。それはもしかして同情じゃなくて愛情かもしれない。それは分からないんですけど、それを受けた瀬文も当麻の才能をすごく買って、そこをすごく頼っているところもあるし。そうやってお互いがお互いを求め合っている、支え合っている。素晴らしい、素敵な関係性だと思います」

だからなのか、“『SPEC』のラストはどのような終わり方がふさわしいと思いますか”と尋ねると、即座に彼女はこう答えた。

「たとえ二人が絶体絶命の状況に陥っていても、当麻と瀬文のラブじゃない愛情や信頼感が、最後にキレイにカッコよく描かれていたらいいなって」

“この『SPEC』という作品は私の生涯の中でとても大きな財産になったと思います”と戸田。同時に“悩みが一つ増えました”とも。それは今の彼女にやりきった感があるから、に他ならない。

「ここからどうしていけばいいのかなって。次の目標が見えなくなっちゃったんです。逆をいえば、それだけ自分の誇りになったし、間違いなく自分の中の代表作の一つになったという自負でもありますね」

それはつまり、“終わりの始まり”。この作品をスタートラインにしてもっともっと大きく羽ばたくことが出来るということ。これこそ、「SPEC」が女優・戸田恵梨香に向けて発揮した最後のSPECに違いない。

戸田恵梨香
1988年、兵庫県生まれ。映画、ドラマ、CMなどを中心に活躍中。2011年初夏公開予定の映画「阪急電車」が撮影中。2011年１月よりフジテレビ系・毎週月曜午後９時からのドラマ「大切なことはすべて君が教えてくれた」に主演する。

Review 戸田恵梨香／当麻紗綾 論

Toji Aida : text

ワイルドなのに、プリティに、世界は、ここに、ある。

私たちはいま、「SPEC」の真っ只中で、この女優がはらむ破格の説得力に立ち会っている。しかもその力は、きわめて有機的に、21世紀に対応してもいる。

無粋な比喩をあえて用いるが、戸田恵梨香がここで披露しているのは「地デジ対応」の表現である。現代日本人の合い言葉のように流布された「地デジ対応」なる語句だが、その意味について真剣に考えたことはなかった。「SPEC」の戸田を目撃したとき、初めて感覚的に、この語句を受け取ることができたのである。

「地デジ」に関しては画質のことが取り沙汰されることが多いが、私たち視聴者にとって重要なのは、純粋な視覚上の画面サイズであろう。縦横比率４×３から、16×９へ。そのとき映像が映し出すものは明らかに変わる。いや、変わらなければいけない。変わらなければいけないのは撮影技術だけではない。演じ手の演技が見せる内実も変わらなければいけない。

16×９の時代において、見る者の感性としての視野もまたワイドにならざるをえない。そのとき「人物」だけを見つめるのではなく、「世界」を見通すことが可能になるのだ。「SPEC」の当麻紗綾を見るとき、私たちは「世界」を見る。「世界」のなかに「人物」がいるのではない。「人物」のなかに「世界」があるのだ。それは、演出によるものではない。当麻の像は演出家によって変幻する。当麻を通して「世界」を感じ取ることができる理由は、戸田恵梨香がそのように演じているからである。

第４話で、「右へ」と示された表示を視界におさめながら、当麻は左に突き進む。それが勘違いなのか、本能なのか、当麻自身にもわかっていないが、それを瀬文焚流に馬鹿にされた当麻は泣く。今井夏木ディレクターの証言によれば、台本では「ムッとする」と描かれていたリアクションを戸田が自発的に改良したのだという。「人物」に回収されない、「世界」のありようがここにはある。説明不能な何かに私たちは感動させられる。それは心理や感情ではない。「世界」としか名づけられないものなのである。

振り返ってみれば「LIAR GAME」の戸田は主人公でありながら、あのなかで最もフラットなキャラクターではなかったか。あるいは映画「大洗にも星はふるなり」の戸田は７人の男たちそれぞれの妄想のなかだけに存在する、彼らの「世界」そのものではなかったか。

脳をフル回転させるために、鬼のように喰いまくる当麻は能動と受動のあわいに生きている。いや、彼女は能動でも受動でもない領域を生きているのかもしれない。パソコンを睨むまなざし、やおら上空を見つめる祈りのような視線がやけに美しいのは、きっとそのせいだ。そして「うぬぼれ刑事」にゲスト出演した回（演出は土井裕泰）でもそうだったように、ワイルドなのにプリティという特性こそが、すべてが等価に存在する「世界」を明るみにする戸田恵梨香の本領なのではないだろうか。

SPEC 最終回はどうなる？

いよいよクライマックスを迎える「SPEC」。
8話までに振られたさまざまな謎。そして、近づく最終決戦のとき。
当麻は、瀬文は、そして、ニノマエの運命は……。
いま、私たちは地上波ゴールデンで見続けてきた
あり得ないドラマの、あり得ない結末に立ち会おうとしている。
もう後戻りはできない。パンドラの箱は開いてしまっている。
すべてを疑い、すべてを信じ、自分の目で確かめてほしい。

Koichi Kuroda : photo

時は、来た——。

「時代は変わる。人間の進化がもし、本当なら、真実を覆い隠すことは許されない」(第８話・辛の回～魑魅魍魎　野々村光太郎のセリフを抜粋)

ならば真実に迫ってみよう。「SPEC」の真実に。主人公はIQ200を越える天才（そして変人）の当麻紗綾と警視庁特殊部隊（SIT）出身の叩き上げである瀬文焚流の二人。当初はこの二人が、常人にはない特殊能力＝SPECを持った犯罪者を追いつめる、1話完結のミステリードラマだった。だが、8話を終わった段階で物語の様相は一変……いや、二転三転以上の、もはや着陸地点が予想不可能な展開を見せている。

当麻VSニノマエ、最後の戦いがはじまる

Junya Uesugi : text

その兆候は、実は1話の段階から巧みに伏線として織り込まれていた。物語のスタート段階で当麻はすでに謎の美少年・一十一（ニノマエジュウイチ）との因縁があり（５話で彼によって彼女の左手が切断されていたことが明らかになる）、瀬文は突入作戦中に部下の志村を誤射したと疑われ（８話でこの事件は一〈ニノマエ〉の仕業だと瀬文は知る）、未詳に左遷されてくる。そして当麻は自分の左手を失うことになった原因、その因縁の相手を追い、瀬文は志村の誤射事件の真相を追う……つまり二人とも否応なく一(ニノマエ)と関わらざるを得ない状況になっていたワケである。

つまり未詳にとって、一（ニノマエ）は宿命の相手。当麻はもちろんだが、瀬文にしても、志村の惨殺にこの男が関わっていると思い込んでるふしがあり(8話)、当麻と二人で宿敵に挑む可能性が大なのだ。ただ、そうなると相手は時を止める究極のSPECの持ち主。二人のどちらかがSPECの持ち主でないと、対等に闘えないのでは……と考えるのが普通だろう。この点を植田博樹プロデューサーに尋ねると「それはね、一番最後の最後の話で……。あの～ちょっとどうなのかっていう感じですかね。本当にそこは『幻魔大戦』にするかどうか迷ったところなんですよ、実は」とかなり悩んだ様子。

だが、当麻たち未詳の敵は一（ニノマエ）や彼を始めとするSPEC HOLDERだけではない。公安部特務専任部長の津田助広とその配下が目的を達するために本格的に動き出したのだ。これまでにも、占い師の冷泉俊明を隔離・保護したり（１話）、未詳から古戸久子の身柄を奪い（４話）……と一環してSPECの持ち主たちをマークし続けていたが、やはりというか、SPEC HOLDERのリストを作成していることが判明（６話）。つまり未詳よりも以前にSPECについて研究していたわけだが、その正体はSPEC HOLDERたちを片っ端から抹殺する特殊能力者対策特務班だった（８話）。津田率いる警視庁公安部公安零課。怪しい怪しいと思って、実は……と思っていたら、本当に怪しかったワケだ。植田プロデューサーが語る。

「津田はでもね、切ないなって思っていて。名前を捨て、顔を捨て、自分自身の存在を捨て、ずっと国家に尽くしている存在なんですよ。結局、何を守っているのかみたいなね、すごく切ない存在なんです」

問題はこの津田たちにとっての未詳の存在だ。「我々未詳の裏の組織。いや、むしろ我々の方がただの囮だな」とは８話での野々村係長のセリフだが、これはつまり、未詳はSPEC HOLDERたちをおびき寄せる囮である、ということ。その囮が、里中貢の冷泉俊明奪還未遂事件以降、明らかに津田たち零課にとっては目障りな存在になっているのである。その正体に迫ろうとした瀬文に対して処分命令を出しただけでなく、未詳までも取り潰してしまった（８話）。さらにその直後、瀬文は一（ニノマエ）との交換条件で津田の拉致に協

力してしまった（8話）。明らかに敵対関係となった未詳と零課。この対決の行方は、さて……。

当然、こうなると零課に狙われるハメになったSPECの持ち主たちも黙ってはいないのではないか。「我々の存在に気づいてしまった以上、仕方ない」とは脇智宏の（1話）、「たまたまSPECがあるからといって、お前たちの仲間にはならない」とは林実の（3話）のセリフだが、これらのセリフが匂わせていたように、SPEC HOLDERたちが属する何らかの組織が8話のラストでついに登場した。一（ニノマエ）が会話していた相手が、そのメンバーなのだろう。実はその正体が病を処方するSPECの持ち主だった海野医師は当麻に対してこんなセリフを発している。「我々はマイノリティだ。体制による暴力には能力で対抗する」と（6話）。これには植田プロデューサーも「『デビルマン』とか『NIGHT HEAD』みたいなことはやめようって、最初から思ってました。超能力があるせいでオレたちは迫害されてるっていうんじゃなくて、抜きん出てしまったエリートだから叩かれてしまうところがリアルなんだと。だから選ばれたマイノリティだから哀しいというよりは、マイノリティの反乱ですよね。そういう意味でいうと革命でもあるし、ある種の戦争でもあるし。まぁそれを仕掛けてくると思いますよ、ただ黙っているワケがないので」と彼ら側からの、何らかの反撃があることを認めている。つまりそれは未詳、零課、そしてSPEC HOLDERの集団と最後は三つどもえの闘いになるということなのでは……。植田プロデューサーいわく「こういうドラマのときって、観ている人にとっては分かりやすいから、敵は一つっていうのが定番なんですが、ボクはそれをやりたくなかったんです。まぁ、四つ巴、五つ巴、いろんな人たちが出てきますね」。

細かい部分でも、気になる点がある。それは6話のラストで志村美鈴が当麻に対して言い放ったこのセリフだ。「あなたも、本当は向こう側の人間でしょ」。いったい“向こう側”とはどういう意味なのか？　美鈴が自分自身をSPECの持ち主と自覚している以上、これは、当麻はSPECの持ち主ではないということになる。その上で、“あなたも”の“も”に注目したい。この“も”は果たして誰のことを指しているのか？SPECの持ち主ではない＝当麻は自分の敵とも考えられるが、当麻のビジョンを見た美鈴は7話の冒頭でこう彼女に言っている、「ホントにカラッポの女」と。だが、これも実は当麻が相手のSPECを無力化するSPECの持ち主なら、即座に解決する。そしてまさか、この能力で一（ニノマエ）に勝利するのかーー？

さらに植田プロデューサーはこんな興味深い話をしてくれた。登場するある人物とある人物の関係についてである。「最初に人物表を作ったときにバレバレだなと思ったんです。だからヒント出すのもイヤらしいなと。でも、台本作ってるときとかもそうだったんですけど、あまりにも誰も指摘してこなかったので、これどうなんだろう？　と思って、ちょっとずつ伏線入れました。これまでの話をよ～く振り返ってもらえると合点のいく人は合点がいくと思いますよ」。

最後は『24』のように、ガコーンと終わりたい

最後に肝心のラストについて予想してみたい。「SPEC」の前作と位置づけられる「ケイゾク」のラストはある意味、悲劇的な余韻のあるラストだった。それだけに今回はそれを踏襲するのか、全く違うものにするのか、どちらもありえる展開なのだが……。植田プロデューサーはひとつだけ教えてくれた。「そういう意味でいうと『24』ですよ。ガコーンって終わるじゃないですか。アレをちょっとやりたいです」確認は、最終回で。

最後はどうなる!? キャラクター／第8話までのファクト

	1話	2話
当麻 紗綾 Saaya Touma	●中部日本餃子の店 CBC にて、店主の餃子ジグソーパズルが、1ピース足りないことを、瞬時にして発見する。 ●CBC にて餃子を大量摂取後、財布を紛失。金1万600円也を未払いにつきミショウへ突き出される。 ●入手した「ブリ爺さんの超スーパーミラクル気功術」の DVD を、野々村と共に映像研修。瀬文に罵倒される。 ●五木谷の秘書・脇が「先生」と呼ばれているのを見て、脇をおちょくる。 ●午後9時に冷泉の予言を開封し、当たっていることに驚く。 ●カリウムを一気に多量投与すると心臓麻痺を起こして死ぬことを、脇に説明。その後代議士・五木谷毒殺事件の犯人を脇と断定。 ●しかし脇の投げたテニスボールがこめかみに当たり、気絶。 ☆心に残るキメ台詞＝「いただきました!!」	●脇に受けたダメージで入院するも、旺盛な食欲を見せるまでに回復。瀬文によって強制的に退院させられる。 ●10年前に起こった、青山華道家死体なき殺人事件の事実関係を確認。その最中、上空に何者かの視線を察知する。 ●10年前殺された華道家・鬼門のアトリエを検証。いくつかの不審点を発見。 ●鬼門の相棒だった板野に接触。10年前の状況を聴取中、再び何者かの視線を感じる。 ●鬼門殺害の犯人を、板野と断定。アリバイを崩し、トリックを解明する。 ●自称千里眼の死刑囚・桂小五郎に、一との経緯を察知される。 ●CBC にて地居と遭遇。 ●桂をめぐり、何者かが情報操作していることを確信。 ☆当麻 KY 台詞コレクション＝「萌えるな。ククク」「かぐわしいですなあ」「ぶっちゃけ、メチャキモいすよね」「でた。お約束のフレーズ」
瀬文 焚流 Takeru Sebumi	●SIT 勤務時、部下の志村から突如銃撃を受けるが、奇妙な時間制止現象により、逆に志村が弾丸を受けて重傷を負う。 ●聴聞委員会にかけられた後、馬場からミショウへの異動を命じられる。 ●占い師・冷泉俊明を恐喝容疑で逮捕・拘留。 ●病院の志村を見舞うが、美鈴と海野に拒絶される。 ●五木谷殺害事件の犯人・脇の逮捕に挑む際、脇の投げたテニスボールが左腕に命中。骨折する。 ●脇の放った弾丸から逃れる。 ☆それを言ったらヤバいだろう台詞＝「長いよ、ブス」＞当麻。	●聴聞委員会にて、五木田代議士毒殺事件における犯人・脇射殺に関する事実関係を釈明。 ●鬼門殺害事件の容疑者である板野と松井に接触。アリバイなどを確認。 ●鬼門殺害事件の犯人として、板野を逮捕。 ●桂に板野逮捕を告げるが、鬼門真理子の共犯を示唆される。 ●桂に、志村との一件を察知される。 ☆なかなかシブい台詞＝「ええ。犯罪者はみな、下種なんでね」
志村 美鈴 Mirei Shimura (志村優作の妹)	●瀬文からの入院費提供を拒否。「卑怯者」と、なじる。 ●眠っている志村の額から、ヴィジョンを見る。	●志村に触れてヴィジョンが見えたことを、海野に告白。
冷泉 俊明 Toshiaki Reisen (占い師)	●五木谷殺害を予言。未来を変えるためと称して、五木谷に2億円を要求。 ●当麻に依頼され、彼女と瀬文が午後9時に何が起こるかを予知。 ●瀬文に逮捕され拘留されるが、津田によって留置所から連れ出される。	
海野 亮太 Ryota Unno (志村優作の担当医)	●志村を見舞いに来た瀬文を「不整脈が起こっている」と、退室させる。	●志村のヴィジョンを見た件で、美鈴に検査を勧める。
地居 聖 Satoshi Chii (当麻の元彼氏)	●CBC にて、当麻が落とした財布を発見。また当麻に復縁を迫るが、あっさり拒否され、彼女の餃子を左手でつまんで食べる。	●CBC にて当麻と遭遇。彼女の餃子をヒョイパクとつまみ食い。
正汽 雅 Miyabi Masaki (警視庁に働く婦警)	●正義党代議士・五木谷とその秘書・脇をミショウに案内する。	●「出来たかも」と、野々村に悪魔の囁き。 ●神父・教誨師の大島優一郎をミショウに案内。
志村 優作 Yusaku Shimura (瀬文の部下・現在植物状態)	●SIT 勤務時、瀬文に放った弾丸を受けて重傷を負う。以後植物状態に。	
一 十一 Juichi Ninomae	●制止した時間上に出現。脇の発射した銃弾を、逆に撃ち返して脇を殺害。	●桂の死刑執行直前に、制止した時間上に現れる。桂の命乞いを「やだね」と拒否。
津田 助広 Sukehiro Tsuda (公安部特務専任課長)	●拘留中の冷泉を連れ出し、取引を持ちかける。	●桂の千里眼が、実は異常に鋭敏な聴覚であることを解明。桂にその事実を告げ、その後死刑執行を手配する。
野々村 光太郎 Kohtaro Nonomura (公安部公安第五課 未詳事件特別対策係係長)	●当麻の食べた餃子代1万600円を、CBC 主人に支払う。 ●雅の就職先が警視庁だと知り、とっても驚く。 ●雅から結婚の時期を尋ねられ、シェイクを飲んで誤魔化す。 ●糖尿病治療用のインスリン注射を、切腹のように腹に打つ。 ●五木谷のパーティーで、菅幹事長の持参した故郷の勝ち酒を、参加者全員が見守る中、毒味。美味しかった様子。 ●管の秘書・上野を五木谷毒殺事件の犯人と断定するが、五木谷の死因は心臓麻痺と判明して恥をかく。 ☆どこかで聞いたことのある台詞＝「私は犯人、わかっちゃいました」	●大島を通して自称千里眼の男・桂から挑戦を受けるが、のらりくらりとかわす。 ●と、その事実をツブヤイターで攻撃され、一転して挑戦を受けることに。 ●かつての部下・近藤より10年前の鬼門殺害事件の資料を受領(テレ朝版に非ず)。 ●当麻より電話を受けるが、鈴虫の声がうるさくて、よく聞き取れない。

最終回に向けて、第8話までの「SPEC」主要キャラクター11人の動きを追った。
なお、この「ファクト」は、構成者の目線から見た「ファクト」であり、製作者の意図を含まない。

Morihiko Saito : text,diagram making and composition

3話	4話
●CBCにて地居から辞職を勧められるが、あっさり拒否。 ●野々村より、目的不明な張り込みを指示され現着するも、品川区東品川の場所を間違えて、瀬文とタクシーで現場へ。 ●IPS細胞研究の第一人者・中山教授の絞殺死体を見て、不審な事柄を発見。 ●中山の論文を書いたのは、助手である林実と指摘。 ●憑依する側が右利きだと、された側が左利きになることを発見し、「人類初の大発見」と絶賛。 ●中山教授殺害の犯人は、助手の林実だと断定。 ●鹿浜に憑依した林から発砲される。格闘の末、今度は猪俣に憑依した林から銃口を向けられる。 ●ミショウにて、蝿を叩こうとした時、時間が制止。 ●モニターの録画から、一の顔を発見。 ☆思わずうなずく？名台詞＝「ミステリーは、ここが長いんだよ」	●古戸からの自殺サークル捜査依頼に、俄然やる気を見せるも、瀬文に無視され、公安名物転び公妨で抵抗。 ●自殺サークルのサイトに怒りを感じ、次々とウェブ上から削除。 ●瀬文が力で開けられなかった、蔵の鍵をたやすく開ける。 ●パーフェクト・スーサイドに登録。しかも近藤、瀬文も一緒に。 ●CBCにて、またしても地居に復縁を迫られるが、またしても拒否。 ●バイクのブレーキ痕が、ひとつしかないことに気づく。 ●PS幹事殺害の犯人を、古戸と断定。ブレーキ細工のトリックを解明。 ●併せて、遺品のすべてに傷をつけたのは、古戸の念動力であると指摘。 ●さらに、幹事の正体が娘の美智花であることを明かす。 ●逆上した古戸の念動力で、床にたたきつけられる。 ●謎の集団の襲撃により、失神。 ☆いつになく怒りモードでの名台詞＝「死は確かに、不意に襲うものかも知れないけど、他人が誘うものじゃない」 ☆出た!!究極の名台詞＝「高まる〜う!!!」（体をくねくねさせつつ）
●海野から、志村を助けるために細胞蘇生能力を持つ超能力者のデータ提供を求められるが、拒否。 ●路上にて、女の声に振り返ると、誰かの体が肩に当たり、脇にやられた左腕の負傷が治癒する。 ●憑依された武藤純がガソリンスタンドでガソリンをまき散らし、引火させようとするが、これを未然に阻止。 ●中山教授殺害の容疑により、助手の林実を逮捕。	●自殺した7人の遺品を見る古戸が震えていることに気づく。 ●PSの幹事・植松の正体を突き止める。 ●PS自殺集会が襲撃され、古戸を背負って山荘から脱出。逃走するバイクを当麻と共に追跡する。 ●古戸の念動力でガラスが割れ散乱し、金属音が鳴り響く中、PCのコードを切断し、古戸にコードを押しつけて倒す。 ●同時に、謎の集団の襲撃に遭い、殴られて失神。
●TVニュースに映った林実の顔を、志村のヴィジョンで見たと、海野に報告。彼以外にも冷泉、桂の顔も見た模様。	●予備校でのバイト中、地居から食事に誘われるも拒否。 ●地居が落とした部屋の鍵からヴィジョンを感じ、CBCに届ける。
●津田とゲームに興じる。 ●憑依された武藤が、ガソリンスタンドで事件を起こすことを予言。	
●志村を助けるため、瀬文に超能力者のデータ提供を求めるが、拒否される。 ●かつて神の手を持つ男に、治癒を受けたことを瀬文に告白。 ☆なんだか染みる、名台詞＝「医者ってのはね、死に慣れていると思われていますが、本当はそうじゃない」	●里中梨花を、警察病院で診察。額を接触させる。
●CBCにて、当麻に刑事辞職を勧めるが、あっさりと拒否される。	●予備校で授業の後、部屋の鍵を紛失。 ●CBCにて、ひとり餃子。美鈴が鍵を届けてくれたことに驚く。 ●CBCにて、またもや当麻に復縁を迫るも、またもや拒否される。
●コソコソした関係はイヤ、と野々村を責める。	●ミショウに捜査一係弐課の近藤係長と、自殺者遺族ネットワークの古戸久子を案内する。 ●再び近藤と古戸をミショウに案内。 ●野々村の妻を自殺サークルに登録することを、笑顔で進言。
●制止した時間に現れ、留置所の林実に「死ね」と告げる。 ●その際、高圧電流を体内に受け、苦しみながら当麻の名を口にする。	●警察病院に出現。
●冷泉とゲームに興じる。 ●冷泉の予言を聞き、ガソリンスタンド事件の現場へ当麻と瀬文を向かわせるよう、間接的に指示する。	●謎の集団を率いてミショウを襲撃。古戸を確保する。
●「できたのは、僕の子？」と、禁句を発して雅にひっぱたかれる。 ●逮捕された武藤の取り調べをマジックミラー越しに見て、武藤の憑依を当麻、瀬文と共に目撃。 ●武藤と林実が、共に目撃した女性托鉢僧の存在を当麻らに明かし、日本全国の林実に警告すべく指示する。 ●憑依事件の解決を、馬場から命じられる。 ●憑依された警官・大井が左利きであることを発見。 ●留置所の林実が死亡したとの電話を受ける。	●ミショウに神棚を設置し、離婚祈願の札をかけるも、当麻に破壊される。

	5話	6話
当麻 紗綾 Saaya Touma	●瀬文と里中が酒を飲んでいる焼き鳥店で親子丼11人前をたいらげ、瀬文からパンチをくらう。 ●病死した潜入捜査官5人が、同時期に健康診断を受けていることに疑惑を感じる。 ●ボロボロになりながら一の逮捕を試みるが、爆発で左手首を切断したことを回想する。 ●公安のデータベースに侵入。里中が現役の潜入捜査官だった事実を解明。二重スパイを働いていたと推理。 ●病を処方するSPECの可能性を、野々村、瀬文に示唆。 ●秋元のPCにあったMAPコードから、証人保護施設のマンションを発見。里中が冷泉を拉致しにやって来るであろうと、瀬文に告げる。 ●小百合に里中の死を知らせようとするが、野々村と瀬文に止められる。 ☆核心をついた名台詞=「あたしたち、気をつけないと消されるかも知れませんなあ」 ☆いつもの挨拶=「おつかれやまです」「おつかれサマンサですう～」 ☆感涙ものの名台詞=「私情は禁物です。でも…はい!!」	●里中の部屋で、蔵書を整理したのが里中本人でないことを瀬文に指摘。里中に証拠を残されると困る、大がかりな集団の仕業と推理。 ●小百合のバッグの中から里中の図書館カードを見つけ、図書館にて里中が最後に借りた本から、ミニSDカードを発見。 ●そのカードの中からSPEC HOLDERのリストを探し当てる。 ●里中が「病を治す能力を持つ者」を探していたことを突き止める。 ●宮崎の自殺で落ち込む瀬文に、餃子入り鍋焼きうどんをふるまう。 ●海野が瀬文に提供した、宮崎についての情報がすべてダミーであり、海野こそが「病を処方する能力を持つ者」だと確信する。 ☆心に迫る名台詞=「一人の人間の一生をこんだけメチャメチャにして、守るべきものって何なんすかね」 ☆本質を突いた台詞=「闇に沈む真実もあれば、光差す真実もありますって」
瀬文 焚流 Takeru Sebumi	●SIT時代の先輩・里中と久々に再会。楽しく酒を酌み交わす。 ●IDを使って公安のPCをハッキングしたと、秋元に疑惑をかけられる。 ●IDコードをコピーしたのは、里中かと疑う。 ●里中の妻・小百合より、娘の梨花がジェニファー氏病で、余命わずかなことを聞く。 ●里中母娘を守ための方法を当麻に聞くべく、頭を下げる。 ●情報屋から、警察の保護施設から証人を拉致する計画があることを聞き出す。 ●冷泉を拉致しようとする里中と交戦状態に。 ●梨花に病を処方した犯人を聞く直前、里中が何者かに射殺され、それを目撃。 ●里中母娘の幸せを守ることを、改めて当麻に誓う。	●里中が最後の出張前、室内の蔵書や荷物を整理していたことを、小百合が疑問に思っていると聞く。 ●「病を処方する能力を持つ者」についての情報を海野に求め、海野の知り合いの医者・織田を紹介される。 ●医療技師・宮崎が、潜入捜査官5人の病死に関わっていることが判明するが、宮崎が2週間前に自殺としていたと分かり、愕然とする。 ●当麻の作った餃子入り鍋焼きうどんを食べ、「まずい」と率直な感想をもらし、攻撃を受ける。 ☆それを言ったら、本当にヤバいだろう台詞=「なんだと。サカナ顔のくせに」>当麻。
志村 美鈴 Mirei Shimura (志村優作の妹)	●海野との面談中、受験を断念する件で志村と口論になったことを回想。	●当麻のPCのカードリーダーに触れ、ヴィジョンを読み取る。 ●海野に梨花の手術をやめるよう求める。●当麻に手を伸ばし、彼女のヴィジョンを読み取る。
冷泉 俊明 Toshiaki Reisen (占い師)	●津田の持参したクラクラ寿司のイクラを食べ、眠らされる。	
海野 亮太 Ryota Unno (志村優作の担当医)	●美鈴を呼び出し、志村の病状が回復困難であることを告げる。	●中2の頃、自転車事故で右手の掌を半分切断したが、ある男の手で治癒したことを、瀬文に告白。●「病を処方する能力を持つ者」であることを知られる●梨花の手術を成功させた後、病院から逃走。 ☆物事の悲しい本質をつく台詞=「ボクだって、生命を救うSPECが欲しかったですよ。ただ才能ってのは、自分が望むものと一致しない」
地居 聖 Satoshi Chii (当麻の元彼氏)	●かつて当麻に指輪を贈り「広い意味でのプロポーズ」をしたことを、当麻に回想される。	●美鈴とミショウを訪問。
正汽 雅 Miyabi Masaki (警視庁に働く婦警)	●公安第五課の秋元課長代理を、ミショウに案内。 ●その際、「プロポーズされちゃった」と野々村に告げ、あわてさせる。	●地居と美鈴を、ミショウに案内する。
志村 優作 Yusaku Shimura (瀬文の部下・現在植物状態)		
一 十一 Juichi Ninomae	●海野に「手が火傷をして」と、患部を見せる。 ●その後制止した時間の中で、里中梨花の住所をメモして姿を消す。 ●かつて当麻の逮捕から逃れたことを、当麻に回想される。	●(夜道にて、猫にエサをあげ、その直後闇に消える)。
津田 助広 Sukehiro Tsuda (公安部特務専任課長)	●持参したクラクラ寿司のイクラで冷泉を眠らせ、移送する。	●「クソにたかる蝿ども」と、何者かを非難する。
野々村 光太郎 Kohtaro Nonomura (公安部公安第五課 未詳事件特別対策係係長)	●秋元より、潜入捜査官5人の病死の真相解明を命じられる。 ●イキがる公安の若手・峯岸をハードボイルドにたしなめる。 ●瀬文のIDを使った公安PCのハッキング事件は、ミショウで解決すると宣言。 ●拳銃2丁と弾倉数点を、紙袋に入れて瀬文に手渡す。 ●雅から、多量のパフェを摂取させられる。	●瀬文、当麻と里中の葬儀に参列。 ●雅に「後で電話する」と言われて、ぷるん♪と喜ぶ。 ☆いつになくカッコイイ台詞=「この街の灯りひとつひとつに、ひとつの家族があり、ひとつの幸せがある。それを私ら刑事は、命がけで守っている。命をかける価値がある」

7話	8話	9話／10話
●海野が残した扇子をもらい、持ち帰る。 ●海野が大規模な組織による殺人を行っていたと断定。 ●里中は、冷泉の霊能力を認めていたと推理。 ●一との経緯を透視され、サトリに怒り爆発。 ●警視庁の超秘匿連絡網回線を盗聴し、冷泉が奪取されたことを、瀬文、野々村に伝え、サトリが冷泉を運ぶワゴンの位置を割り出す。 ●サトリの目的は、大メジャーの一部が才能ある人材を取り込むことで、その覇権争いであると断定。 ●サトリ逮捕のタイミングを図るため、経費の精算をして時間を稼ぐ。 ●サトリの弱点が睡魔に勝てないことだと突き止め、12時になる直前にSITを突入するよう仕向け、サトリのクルマを地下駐車場に誘い込む。 ●蒲田に向かい、一の家を発見。一の母親・二三と会う。 ☆なかなか文学的な台詞＝「だいたい歴史の変節点は、いつも静かに私たちの真横をかすめていく。誰かがそのことに気づいた時は、既に手遅れなんす」	●一の家で、十一と会う。すかさず銃を抜くが、突然高所へと移動してしまう。そこで一と対峙するも高所より落下。自宅の自室にて目を覚ます。 ●野々村から、瀬文の荷物が片付けられており、辞表が置かれていることを聞く。 ●瀬文に電話で、自分は仲間であることを切々と語るが、電話が切れていて怒る。 ●一の家に向かうが、既にもぬけの殻。洗面台の隙間から、男ものの歯ブラシを発見。 ●津田の失踪に際し、瀬文と一の姿が目撃されていることを無線で知る。 ☆またまた泣ける名台詞＝「あんたはミショウの人間じゃねえのかよ。だったらあんたを心配しているあたしたちは、何なんだよ」＞瀬文。 ☆時にはその場の空気を察する当麻の名台詞＝「難しいこと考えるのやめて。笑っとくってのはどうすかね。二人とも、ずっと笑ってないでしょ」＞瀬文、志村。	
●海野の居場所を察知。急行するも海野の姿はなし。 ●ミショウに現れたサトリが、冷泉奪取を宣言。 ●志村の病室へ。銀だこの袋を出して置く。 ●サトリ拘束に成功。 ●冷泉を逃がしたと、野々村に虚偽の報告をする。 ●冷泉の予言に従い、「ヒーリングルーム・イーリス」を訪れる。 ☆男の友情に、シビレる台詞＝「俺が必ずお前を救う。お前も自分を諦めるな」>志村。	●ヒーリングルーム・イーリスを訪れ野球少年から、津田の引き渡しを要求される。瀬文は津田を引き渡す前に、ヒーラーの能力の立証を求める。 ●病院にてナースふたりから、津田の引き渡しを要求され、コインロッカーの鍵を受け取る。 ●ロッカーの中より、津田の写真とUSBを発見。 ●志村の病室にて、SIT時代を回想。 ●USBを解読。「津田助広」「アグレッサー」「零課」「中野学校」などの文字を発見。 ●もと警察官のフリーライター・渡辺に、津田の居場所を強硬に尋ねる。 ●国会議事堂前で、美女から自動車に乗せられる。後部座席には一が出現。一は志村の命を救うと、瀬文に約束。 ●SITでの志村の発砲にまつわる経緯に、一が関係していると知り驚く。一と共に津田を奪取。 ●志村の蘇生を美鈴と喜び合う。 ●公園にて、死亡した志村の名を叫ぶ。 ☆間接的プチ・プロポーズともとれる、微妙な感情表現＝「お前と出会えて良かった。と、たまに、一瞬、稀に思う」>当麻。	
●当麻に触れて彼女のヴィジョンを読むが、餃子だけなのであきれ果てる。 ●一瞬少年が、猫にミルクをあげているヴィジョンを目撃。 ●川里医師より、志村の強制尊厳死同意を強く求められ、瀬文に伝える。 ☆思わずうなづく名台詞＝「警察って人は殺すけど、誰も助けてくれないのね」	●瀬文が持ってきた銀だこに触れた際、瀬文と志村の思い出を追想する。 ●SITでの志村発砲事件について、瀬文の証言がすべて真実だと知る。 ●志村の蘇生を喜ぶが、サラリーマン風の男たちによって、志村が消える。	
●サトリの襲撃を受け、拘束されてしまう。津田は重傷を負う。 ●ピンクの部屋に監禁される。サトリが現れ、世界各国の要人の寿命を予言するよう命令。それに対して、AKB読経で抵抗。 ●サトリの運転するクルマに、猿ぐつわで拉致される。 ●瀬文に予言の入った封筒を、当麻に一の家の住所を渡し、何処へか去る。 ☆悲しい宿命を感じる台詞＝「救いようのある未来ならまだいいが、救いようのない未来も見える。私は世界一哀れな人間です」		
		？
●志村の病室を訪れ、美鈴の描いた、少年が猫にエサをやっている画を見て驚き、盗む。	●覚醒した当麻を自宅に見舞う。 ●当麻の家から去る時、仏壇に手を合わせる。そこには当麻の父、母、弟の遺影が。	
	●婚約した猪俣に見えないよう、野々村にラブサインを送ってウィンク。	
	●ヒーラーの力で蘇生。立って瀬文に敬礼し、「気絶していました」とわびる。 ●ブブセラの音で消失。だだっ広い公園に倒れているところを発見される。	
	●瀬文と結託して、津田を奪取。その後ヒーラーを手配し、志村のもとに向かわせて消える。 ●会議室にて、志村の死亡に「約束が違う」と抗議するも、耳の後ろに星形のあざをつけた大人たちに、「子供が大人の決定に口を出すな」と、拒否される。	
●サトリに冷泉を奪取される。	●怪我の治療を終える。 ●赤い部屋で点滴を打ちつつ、渡辺と瀬文の処分及びミショウを排籍するよう命じる。 ●瀬文と一に侵入され、一と共に姿を消す。	
●新宿のシンデレラ（サトリ）に、雅との関係を占ってもらう。その結果、妻との離婚が不可能と告げられ、雅の怒りを買う。 ●また雅の若い恋人が、猪俣だとサトリに告げられてショックを受ける。 ●上層部より、サトリ探索を命じられるが、のらりくらりとかわす。	●雅と猪俣から、仲人の要請を受けて困惑する。 ●上層部より、予算削減により仕分けの対象になったので、ミショウ廃籍の指令を受けたと当麻に告げる。零課＝アグレッサーの実態を暴くべく、当麻と瀬文を呼んだのだと告白。 ☆やっぱりそういうことだったのね、と納得する台詞＝「昔、武係で一緒に働いてた東大卒の女刑事がいてね。今やけっこうエラくなっちゃったんだけど、この前ごそっと資料をくれたんだ」。	

最終回を読み解く6つのキーワード

Junya Uesugi : text

陰謀

何年も前から特殊能力者に対しての対策班としての役目を担っていた公安部公安零課。法治国家としては違法だが、合法的な警察活動では彼らに対して限界がある。つまり零課は公権力のもと、活動を認められた“必要悪”なのだ。その証拠が2話にあった。死刑囚の桂小次郎に対する異例の死刑執行である。これを法務大臣が認めたということは、少なくとも警察のトップや大臣クラスの大物政治家は、日本に超能力者がいるということ、そしてそういう者たちを陰でマークする組織があることを認識しているのではないか。8話で津田は拉致されたが、彼がいなくても零課は機能する。その存在を知る、国家の黒幕的存在が彼らを操ればいいからだ。自分たちの都合の悪いことは人知れず抹殺し、権力を裏で操る存在。だが、狙われる側のSPEC HOLDER側もその能力を結集すれば、黒幕を国家もろとも転覆させることが可能で……。果たして、陰謀が陰謀を呼ぶ、のか？

生と死

その男はときに「命、捨てます」と言う。ときに「命なめんな！」と怒声を発する。瀬文焚流である。相反するが、そこに秘められた真意は“人が死ぬことへの恐怖”だ。前者は“他人を助けるためなら”、後者は“悪人でも、命は命。弄ぶな！”という意味に他ならない。そしてそこに“自分”という視点はない。その一方で、津田率いる公安零課は、“このまま放置すれば国家に害をなすであろう”SPEC HOLDERたちを容赦なく抹殺する。殺人を正当防衛化する彼らは、「命は命」と叫ぶ瀬文とは対極の存在だ。しかし、そんな瀬文も“他人のために”現在の法では裁くことの出来ない相手と対峙したら……。だが、刑事である彼にとって、それは私情にかられたただの“暴力”。ならば、殺すこと以外の究極の裁き方はないのか？　そのSPECによって殺人を犯した海野医師はこう呟いている。「医者はいい。人の命を救える」と。そう、“死んだら終わり”なのだから。

時間

時間とは“時(とき)”そのもの。つまり、過去・現在・未来と流れていく現象であると辞書にある。その語源は止まることなく流れることから“常（とこ）”が転じたという説と、速く過ぎることから“疾（とき）”の意味とする説がある。第1の説なら、“時は止まらない”のだが、一十一（ニノマエジュウイチ）の究極のSPECの前には、そんな概念は無力。彼が作り出す唯一無二の世界で動けるのは、彼と彼が触れたものだけ——。そう、そこでの彼はすべてを支配する“王”だ。だが、それは裏を返せば彼以外の住人がいない1人ぼっちの世界でもある。それでも異分子が現れれば、王の力を持ってそれを排除するだろう。だが、そこで“刹那”の勝負に勝てれば。“刹那”とは仏教における時間の概念の1つで、1刹那の長さは1/75秒と言われている。一(ニノマエ)が時を止める前に、もしこの速さで動ければ……。そう、時は疾（とき）の意味でもあるのだから。

頭脳と肉体

この場合の頭脳は“当麻紗綾”に、肉体は“瀬文焚流”に置き換えられる。IQ201、そして驚異的な記憶力の持ち主である当麻。一方、現場の叩き上げで、引き締まった肉体が武器の瀬文。ともにアンチテーゼ的な存在だが、同時に互いに欠けている大事なものを補いあう理想的な関係ともいえよう。そして、このどちらにも優劣をつけることは出来ない。たとえば高い知力を持ち、なんなく情報を処理できる人間でも、久しぶりの行動をいきなりしようとすると、その手順なりを忘れていることがある。だが、そんな場合でも身体が自然と覚えていることはないだろうか。経験に裏打ちされた感覚的なもの、理屈ではなく“五感”で感じることが。たとえSPECの持ち主が相手でも、互いをフォローし合っているこの二人ゆえに、難事件を解決することが出来るのだ。だからこそ……どちらかが単独行動に走った瞬間、頭脳と肉体は切り離され、最大のピンチが訪れる——。

正義

正義とは“人の道にかなっていて正しいこと”だという。ならば、そこに人が100人いれば100通りの正義があるということにならないか。何が“正しく”て、何が“間違っている”か、なんてどれだけの人がはっきり白黒つけられるのだろうか。例えば津田率いる公安零課だ。彼らがSPEC HOLDERERたちを抹殺するのは、犯罪者だから、という理由だけではない。このまま放置すれば社会が混乱するという危惧があるからだ。だが、SPEC HOLDERにも言い分はあるだろう。「才能ってのは、自分が望むものと一致しない」と海野医師が嘆いたように、望みもしないのに能力が開花した人物もいるハズだ。その能力を悪用したか、否かが議論の対象なのに、それ以前に持ってしまっただけで“悪”だと異端児扱いされる。物の見方が180度変われば、正義の定義なんて簡単に変わる。それぞれが置かれている立場でそれぞれの正義を主張し、終わりなき対立が続いていく——。

真実

いきなりだが、“真実”と“事実”の違いをご存知だろうか？ 一般論として真実は“嘘のないこと、本当のこと”、事実は“現実に起きたこと”。2つともイコールのように思えるが、実はそうではない。事実は一つだが、真実は人の数ほどある言われるからだ。文豪・芥川龍之介の作品に『藪の中』という短編小説がある。藪の中で起きた殺人事件の話なのだが、殺された男の死因について、事件当事者3人の証言がそれぞれ“偶発的なもの”“他殺”“自殺”と見事に食い違っており、結局真相は藪の中という内容だ。つまり、“真実は曖昧な記憶の集合体”なのである。そこでは最早、何が嘘なのかさえ分からない。事実は“人の外部にあるもの”だが、真実は“人の内部にあるもの”とでも定義出来ようか。だからこそ、当麻の、瀬文の、野々村の、美鈴の、津田の、そして一（ニノマエ）の見たものを疑え。
『SPEC』のすべてを疑え。何より真実を……疑え！

ギリシャ神話にパンドラという女性が登場する。神々は彼女に、決して開けてはいけないと言い含めて、ある箱を持たせて地上に送り込んだ。好奇心に負けたパンドラがその箱を開けた瞬間、様々な災いが飛び出した。だが、その箱の底には“希望”が残っていたという説と“絶望”が残っていたという説がある。『SPEC』の全貌が明らかになったとき、そこに残るものは果たして——。

植田博樹プロデュースドラマ
最終回の傾向と対策

Mizuo Watanabe: text

２時間の単発であれ、１クールの連続ものであれ、ＴＶ番組＝ドラマには「最終回」というラストが待っている。

終わらない物語はない。しかし、それはＴＶ番組に限ればという話であって、生きていくことに終わりはなく、限られた時間のなか設定された画面のなかの登場人物たちもまた、第１話のそれ以前も、最終回のそれ以降も、本来は生き続けているわけだ。そうした意味では、ＴＶ番組としてのドラマにも、人生としてのドラマにも、終わりはないのだともいえる。

そうした意味で終わりのない最終回を描き続けてきているのが、本作『ＳＰＥＣ～警視庁公安部公安第五課未詳事件特別対策係事件簿～』のプロデューサー・植田博樹で、氏のプロデュースした歴代のドラマの数々だ。

象徴的なのが、初めて連続ドラマのプロデュースに名を連ねた『私の運命』(94年)。恋人との結婚を控えた佐藤千秋（坂井真紀）の“運命”を描いたこの作品では、婚約者となる鈴木次郎（東幹久）が末期ガンに犯されていることがわかり、千秋、そして周囲の人々もさまざまな選択を迫られることになる。

一見すれば、悲恋の難病ものだ。ただ、本作はそこにたやすくは転ばない。冬の海を背に、千秋に抱かれながら息を引き取る次郎。よくあるドラマならば、このシーンこそクライマックスだろう。しかし、２クールで放送された『私の運命』でこのシーンが描かれたのは、物語の中盤に当たる第11話。最愛の恋人を失ってなお、物語は続き、放送は21話まで続く。

ここから、死はすべての終わりでは決してないという哲学的なアプローチも読み取れ、それは『ケイゾク』と重ねて論証することもできそうだが、つまりこの作品が語っているのは、どう生きるかということ。恋人を失い、その存在を背負い、その不在を抱えながら、それでも――そのうえで、自分の人生をどう生きていくのか。２クール目に当たる第11話以降は、遺児と義母とともに懸命に生きていこうとする千秋の姿、その遺児の小児ガン、そして次郎と遺児の治療にも当たった野心派のエリート医師・片桐俊太郎（佐野史郎）が描かれる。そう、物語は終わらないのだ。

何かを失い、何かを背負い、それを枷にも糧にもして生きていこうとする様を植田作品は描く。それが終わらないドラマたるゆえんであって、それでもそこにひとまずのＴＶドラマとしての終わりがあるとするなら、そこは喪失を経て再生し、初めてたどり着ける場所だ。そんなセオリーもまた、作品には見て取れる。ラブストーリーにおいても、それは同じ。いや、ラブストーリーにこそ、顕著かもしれない。

ハッピーエンドと、アンハッピーエンド。そのフォーマットでいうなら、植田作品のラブストーリーはほとんどがハッピーエンドで最終回を迎えている。悲恋のイメージが強いとしたら、それは中盤までの印象のせいだろう。ラスト前まではアンハッピーが積み重ねられ、そしてラストにハッピーがやってくるのだ。その間、ヒロインとヒーローには、それこそ苛酷な“運命”が襲い、彼らは血も涙も流すことにもなる。

サスペンスとして描かれた『輪舞曲』(06年）しかり、現代を生きる女性たちの心の奥底に迫った『ＳＣＡＮＤＡＬ』(08年）しかりだ。ラスト、数奇な運命で結ばれていた西嶋ショウ（竹野内豊）とチェ・ユウ（チェ・ジウ）が唇を重ね合えるのも（『輪舞曲』)、夫婦として膠着していた高柳貴子（鈴木京香）と高柳秀典（沢村一樹）が愛娘を挟んで笑い合えるのも（『ＳＣＡＮＤＡＬ』)、痛みを知り、傷を作りながらも、前へ、前へと歩みを進めていったからだ。

違うステージへ上がっていくことがエンディングで、植田作品とはそのための物語なのだということもできる。物語自体、違うステージ、高みへと上っていくためのもの。そもそもラブストーリーというのも、そうしたものだろう。恋が愛に、片思いが両思いに、友情が愛情に変わっていくプロセスを、人はラブストーリーと呼ぶ。ただ、植田作品のそれは違う。ゆえに、最終回でもまた違った様相を見せることになる。

タイトルからして示唆的にして同時に挑戦的だった、『Ｌｏｖｅ　Ｓｔｏｒｙ』(01年)。そこで恋に落ちるのは、編集者の須藤美咲（中山美穂）と小説家の永瀬康（豊川悦史）だ。しかし彼らがそれぞれの思い

そこに待つ永遠は、現実なのか、虚構なのか。「SPEC」は終わりなく、

を、自分自身のなかで認めるに至るのは、第11話。そう、最終回のその回だ。いってみれば、そこまでの10話はプレリュードでプロローグ。“ラブストーリー”にたどり着くまでを描くという大胆な作品でもあったわけだ。

また『Ｆｉｒｓｔ　Ｌｏｖｅ』(02年）のタイトルも意味深だといえる。直訳すれば、初恋。もしくは最初の恋だ。教師と生徒という関係でありながら、思いを通わせていた藤堂直（渡部篤郎）と江沢夏澄（深田恭子)。しかしその関係ゆえ、直は夏澄から離れる。そして５年後、直は夏澄と再会するが、それは夏澄の姉・朋子（和久井映美）の婚約者としてだった。

ここから描かれるのは、平たくいうならば三角関係だ。そして最終回の第11話、互いが互いを想い、また思って、夏澄も朋子も直から離れ、それぞれの道をいく選択が描かれる。その２年半後に、三たび出会うことになる直と夏澄。そう、ここからが始まりなのだ。すべてゼロにして、最初に戻っての恋の始まり。

最終回にすべてが転換される。もしくは始まる。そのうえでハッピーエンドが描かれる。少なくともラブストーリーから見ていけば、植田作品はそう分析できる。最高視聴率41.3％を記録し、社会現象ともなった『Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　Ｌｉｆｅ～ふたりでいた日々～』は、さまざまな意味でその究極だろう。

人気美容師・沖島柊二（木村拓哉）と車椅子の図書館司書・町田杏子（常盤貴子）の恋の果てに待っていたのは、杏子の死。ただ、その最終回・第11話のサブタイトル『未来へ』からも読み取れるように、また『私の運命』がそうであったように、死は終わりじゃない。裏を返せば始まりでもある。柊二はひとり生きていく。しかし杏子の存在は永遠ともなったわけだ。

終わらない物語というのも、すなわち永遠。また、終わりに来る始まりの物語を描いているということでも、植田作品の最終回には永遠がある。

ドラマシリーズでひとまずの区切りをつけながら、映画版で精神世界の物語に回収されていった『ケイゾク』(99年)。本作もまた、終わらないドラマだ。映画版のサブタイトルは、『…／Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　Ｄｒｅａｍｅｒ』。ケイゾク＝継続自体も、終わりなき状況を指す。そして『Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ…』といえば、押井守監督の『うる星やつら２　ビューティフル・ドリーマー』。この作品で描かれたのは、夢のなかに飲み込まれた、永遠に終わらない文化祭だ。

ドラマ『Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ…』とあわせ、そのタイトルから永遠となるものは美しいのだという観点を植田作品の最終回から拾い上げることもできる。では、この作品はどうだったか。愛を信じないホスト・白鳥レイジ（渡部篤郎）と、心を閉ざした盲目の令嬢・鷹園亜子（広末涼子）が愛を見つけていく『愛なんていらねぇよ、夏』(02年)。そのラスト、レイジは弟分に刺され、一方で亜子は目が見えるようになる。

アンハッピーを積み重ねてハッピーエンドを迎える、植田作品のラブストーリーの様式だ。ただ、ひどく意味深でもある。姿を消したレイジの居所を尋ねる亜子に、知人女性が指さすのは空の上。それは飛行機に繋がり、海外を暗示するものだが、空＝天国だとも取れる。視聴者にレイジは死んだと思わせる台本場のフェイクで、演出上のテクニックだとも取れる。

ただ、その後描写されたのは、初見ながらレイジをレイジと認める亜子の姿で、それまでのタッチとは打って変わった、いかにもラブストーリー的な明るく華やかな演出だ。そこで思わされるのは、すべては幻想ではないのかということだ。つまりレイジはでに死んでいて、亜子もまた目が見えていないのではないのか。そこは現実ならざる場所なのではないのか。まさに高みの違うステージで、永遠の場所。果たして……。

本作『ＳＰＥＣ』が迎える最終回。そのラスト、物語がこれまでとは違う高みにあげられ、さらなるステージに向かうのは間違いないだろう。そこに待つ永遠は、現実なのか、虚構なのか。そしてこれも間違いないだろう。おそらくその余韻をめぐって、または解釈をめぐって、『ＳＰＥＣ』は終わりなく――それこそ永遠に、語り継がれることになる。すでにしてそれだけのものを孕んでいる作品だ。

終わらない物語はない。しかし、ドラマはさまざまな意味で終わらない。

続くだろう。ドラマは終わらない、永遠に。

第9話 12月10日放送
最終話 12月17日放送

そこに、答えがある。

SPEC／各話解説

スタートは「ケイゾク」か「トリック」と思ったら
「超能力〜！」と1話で、ぶっとび、
5話に至って、いよいよこのドラマ、マジやばいかも、となり、
8話に至ると、ほぼ途方に暮れてくる状態で、
でも、まだあと2回ある、これが「SPEC」の奇跡、軌跡。

Morihiko Saito : text

第1話

甲の回　魔弾の射手
演出:堤 幸彦

警視庁特殊部隊(SIT)隊長・瀬文焚流(加瀬亮)は、とある事件の最中、部下である志村優作(伊藤毅)から銃撃を受ける。しかし奇妙な時間制止現象によって、志村の弾丸は自身に命中。志村は重傷を負ってしまう。公安部公安第五課未詳事件特別対策係＝通称「ミショウ」へと異動した瀬文は、野々村光太郎(竜雷太)と女性刑事・当麻紗綾(戸田恵梨香)に出会う。ミショウを訪れた代議士・五木谷(金子賢)は、占い師・冷泉俊明(田中哲司)が五木谷の毒死を予言し、未来を変える代償として2億円を要求している件の解決を依頼。瀬文は冷泉を恐喝容疑で逮捕し、拘留する。しかし五木谷の開いたパーティーの最

甲

中、五木谷が死亡してしまう。死因は毒殺ではなく心臓麻痺。当麻は五木谷の秘書・脇(上川隆也)がカリウムを注射器で注射し、心臓麻痺を誘発したトリックを見破り逮捕を迫るが、脇の投げたテニスボールが命中。当麻は気絶、瀬文も左腕を骨折してしまう。逆襲に転じる脇だが、一(ニノマエ)(神木隆之介)によって、自ら放った弾丸を受けて絶命してしまう。

一方、公安部特務専任課長・津田助広(椎名詰平)は、拘留中の冷泉を連れ出し、取引を持ちかける。植物状態の兄・志村を思う美鈴(福田沙紀)は、ある日眠っている兄に触れ、脳内に様々なヴィジョンが飛び込んでくることに驚く。

kou

第2話

乙の回　天の双眸
演出:堤 幸彦

脇に受けたダメージが回復した当麻は、瀬文に強制退院させられる。ある日ミショウを神父・教誨師の大島優一郎(佐野史郎)が訪れる。彼は自称千里眼の死刑囚・桂小次郎(山内圭哉)からの依頼を、野々村に伝える。桂は「警察が無能なせいで、のうのうと生き延びている犯罪者がどれだけいるか」と言う。「警察が見つけられなかった犯人に、24時間以内に裁きを下す」と豪語する桂の挑戦を受け、当麻たちは10年前に未解決だった「青山華道家死体なき殺人事件」の再捜査を開始する。殺害された華道家・鬼門(滝藤賢一)のアトリエを検証した当麻は、不審な点を発見。犯人を鬼門の片腕だった板野(斎藤工)

乙

と断定し逮捕するも、桂は鬼門の妻・真理子(森脇英理子)の共犯を瀬文に示唆。同時刻、鬼門のもと愛弟子の松井(岡田義徳)が真理子を殺害する。全ては真理子の陰謀に基づく犯行で、板野は彼女から鬼門殺害を持ちかけられ実行。しかし真理子は、松井とも男女の関係にあった。

事件の後、津田によって桂の特殊能力が、千里眼ではなく異常な聴覚であることが判明。津田は桂の死刑を執行し、桂は一に命乞いをするが拒否され、絶命する。一方、志村のヴィジョンを見た美鈴は、そのことを担当医師・海野亮太(安田顕)に相談。海野は彼女に検査を勧めるのだった。

otsu

第3話

丙の回　漂泊の憑依者
演出：加藤　新

海野は瀬文と会い、植物状態の志村を助けるために、ミショウの所有する超能力者・霊能者のデータの提供を依頼するが、瀬文はこれを拒否。また瀬文は路上で女性の声に振り返るや、誰かの体に肩が当たったことで、左腕の怪我が治癒したことに驚く。

何者かに憑依された武藤純（清水優）が、ガソリンスタンドを襲撃すると、冷泉は津田に予言。津田は野々村に、ミショウのふたりを現場に張り込ませるよう間接的に指示。当麻と瀬文は事件に遭遇するも、瀬文の機転により被害は食い止められる。当麻たちは、逮捕した武藤が憑依される様を目撃。同時期に林実という名の人物に

丙

よる犯罪が続発する。武藤と林は犯行の直前、女の托鉢僧（おおつか麗衣）を目撃したことが判明。馬場（岡田浩暉）から憑依事件の捜査解決を依頼された野々村は、日本全国の林実に対して注意を呼びかけるが、憑依された林実による事件がさらに続発。その時、IPS細胞研究の第一人者である中山和記教授（山浦栄）が絞殺される。死体を見て不審がる当麻は、中山殺害の犯人を林（村杉蝉之介）と断定する。鹿浜（松澤一之）、猪俣（載寧龍二）に憑依するも林は瀬文によって逮捕。留置所に拘留中、制止した時間上に一が出現。林に「死ね」と告げる。体内に電流を受けて苦しむ彼が発したのは、当麻の名前であった。当麻はモニターの録画で、一の出現を察知する。

hei

第4話

丁の回　希死念慮の饗宴
演出：今井夏木

自殺サークル「パーフェクト・スーサイド」に参加し自殺した美智花（三浦由衣）の母親である、自殺者遺族ネットワーク会長の古戸久子（奥貫薫）が、近藤（徳井優）とミショウを訪問。娘はまだ生きており、PS幹事の復讐を恐れているので、救助して欲しいと依頼。俄然やる気を見せる当麻だが、ウェブ上に氾濫する自殺サークルのサイトに怒りを感じ、次々と削除して行く。過去PSに参加した自殺者たちの遺した遺書と遺品を集めていく当麻たちは、その遺品がすべて損傷していることを発見。また当麻は自身と近藤、瀬文をPSに登録。同じくPSに登録した古戸と共に、自殺集会へと向かう。謎の幹事のも

丁

と自殺の儀式は進行するが、突然何者かが会場を襲撃。当麻と瀬文は逃亡するバイクを追うが、バイクは崖から落下、爆発炎上してしまう。だがそのブレーキ痕がひとつしかないことに当麻は疑惑を抱き、事件の犯人を古戸と断定。念動力によって、バイクのブレーキや遺品が曲げられたというのが当麻の推理だ。そして自殺集会の幹事が、美智花だったことを告げる。逆上した古戸が、念動力を発動。室内のガラスが割れ、不気味な金属音が鳴り響く中、瀬文が苦闘の末古戸を倒す。その直後、津田の率いる集団が当麻と瀬文を気絶させ、古戸を連れ去ってしまう。

警察病院では、海野が里中の娘・梨花（堀田悠衣）を診断し、一がその姿を現した。

tei

第5話

戊の回　堕天刑事
演出:堤 幸彦

潜入捜査官5人が病死した件で、野々村は公安第五課の秋元から、真相解明を命じられる。一方瀬文はSIT時代の先輩・里中(大森南朋)と久々に再会し酒を酌み交わすが、翌日、瀬文のIDを使い、公安部超高度機密データベースがハッキングを受けたと疑惑をかけられる。

瀬文と当麻は、里中の妻・小百合(西原亜希)と娘の梨花を訪問。梨花がジェニファー氏病にかかり、余命幾ばくもないことを小百合から聞く。里中母娘を守るため、方法を教えてくれと、当麻に頭を下げる瀬文。「私情は禁物です。でも…はい」と応じる当麻。彼女は、かつて地居よりプロポーズを受けたものの、一逮捕を試み

戊

た際、爆発で左手首を切断したことを回想する。

当麻は公安のPCに潜入、里中が現役の潜入捜査官で、二重スパイであることを探り出す。瀬文はその頃、警察の証人保護施設から証人を拉致する計画があることを突き止め、里中が冷泉を拉致しようとしていると確信。ところが冷泉は一足早く、津田によって移送されてしまう。対峙する瀬文と里中。瀬文は梨花の病を処方した者の名前を里中に尋ねるが、その名を聞く直前、里中が何者かに射殺されてしまう。

里中母娘の幸せを守ることを、再び誓う瀬文に、当麻はこう答える。

「私情は禁物です。でも……はい!!」

第6話

己の回　病の処方箋
演出:金子文紀

　里中の通夜。当麻は真相を隠す警察のやり方に疑問をぶつけるが、「ひとりひとりの幸せを守るのが刑事だ。心臓が息の根を止めるまで、真実に向かってひた走れ」と、野々村は力強く言い放つ。
　小百合は里中が出張前、膨大な蔵書や荷物を整理したことに疑問を抱いていた。瀬文と当麻は、里中の蔵書は何者かにすり替えられたと推理。小百合のバッグから図書館カードを見つけた当麻は、里中が借りた本の中からミニSDカードを発見。それにはSPEC HOLDERのリストが入っていた。一方瀬文は海野に接触。「病を処方する能力を持つ者」の存在を確認し、潜入

己

捜査官病死に関与する検査技師・宮崎を追うが、彼は2週間前に自殺したとの事実の前に愕然とする。失意の瀬文に、餃子入り鍋焼きうどんをふるまう当麻。梨花の手術は、海野が執刀することに。海野こそが「病を処方する能力を持つ者」であることを突き止める当麻。海野の前に美鈴が立ちふさがり、手術を中止させようとするが、海野は「医者としてのプライドと良心にかけて、手術を成功させる」と言い放ち、執刀を開始。手術成功の後、海野は逃走、電話で自らの能力が希望とは逆であることを当麻に嘆く。
　美鈴は当麻に触れ、彼女のイメージを読み取る。当麻の中にあるイメージとは…⁇

ki

第7話

庚の回　覚吾知真
演出：加藤　新

当麻に触れた美鈴は、彼女のヴィジョンを見る。それは……餃子‼あきれる美鈴だが、一瞬、少年が、猫にエサをやっているヴィジョンを目撃したことに気づかなかった。

一方冷泉は「何かが起きる…」と、ただならぬ予感に震える。野々村係長と雅を占った、新宿シンデレラことサトリ（真野恵里菜）がミショウに現れ、冷泉奪取を予告。当麻は彼女から、一との経緯を透視されてしまう。冷泉はサトリの予告通り奪取され、津田は重傷を負う。当麻はサトリの逃走ワゴンの位置を割り出す一方、彼女の目的は大メジャーの覇権争いのためと断定する。監禁された冷泉に、サトリは世界各国の

庚

要人の寿命を予言するよう命じるが、冷泉は拒否し、AKB読経で対抗する。

冷泉は、猿ぐつわの状態でサトリのクルマに連れ込まれてしまう。当麻はサトリの弱点とは、睡魔に勝てない事だと察知。12時になる直前にSITを突入させ、サトリを地下駐車場へと導く。瀬文は眠りに落ちようとするサトリを確保し、野々村には冷泉を逃がしてしまったと報告する。当麻には一の居場所を、瀬文にはいかなる病気をも治す人間の情報を渡し、冷泉は何処かへ去っていく。翌日一の家を訪れた当麻は、十一の母・二三と会う。そして瀬文は……。

kou

第8話

辛の回　魑魅魍魎
演出：今井夏木

一と対峙する当麻だが、一の不思議な能力の前に敗退。自宅で休養する当麻を、地居が見舞う。
瀬文は、とある病院でナースふたりから津田の引き渡しを要求され、同時にコインロッカーの鍵を渡される。ロッカーには津田の写真とUSBがあり、USBからは「津田助広」「アグレッサー」「零課」「中野学校」などの文字が出現する。もと警察官のフリーライター・渡辺麻由人（遠藤雅）に、零課の件を問いつめる瀬文だが、その直後、渡辺が変死。瀬文が重要参考人であることを、当麻から知らされる。
当麻は再び蒲田にある一の家を訪問するが、もぬけの殻。一は母親と新しいマンションに移

辛

っており、そこにいた男に巨額の現金を手渡す。
野々村はミショウの廃籍を当麻に告げ、秘匿していたミニSDカードから、ミショウは零課の囮であり、アグレッサーと呼ばれる零課の実態を暴くために、当麻と瀬文をミショウに呼んだことを明らかにする。
瀬文と一は津田の奪取に成功。一はヒーラーを手配して姿を消す。やがて志村が蘇生。美鈴、瀬文と当麻は喜ぶが、その直後、サラリーマン風の男ふたりによって志村は消失。公園で発見された志村は、既に死んでいた。絶叫する瀬文。一は「約束が違う」と抗議するも、会議室の大人たちから拒絶されてしまう。

shin

第9話

壬の回　冥王降臨
演出:堤 幸彦

? 壬 ?

jin

第10話

癸の回　百年の孤独
演出:堤 幸彦

? 癸 ?

ki

10年の時を超え、「SPEC」が成すもの。

tsutsumi yukihiko

堤　幸彦

「金田一少年の事件簿」を見て、そして、「ケイゾク」を見て、
「トリック」を見て、映画で「20世紀少年」や「BECK」を見て、
私たちは、ずっとずっと堤幸彦を見てきた。
いま、「SPEC」で、堤幸彦は、何を成そうとしているのか。
最終9・10話のタクトは振られた。答えは、すぐだ。

Kenta Yoshizawa : photo

Junya Uesugi : text

〝狙いがない〟ことが、一番スリリングで面白い

それは２話のラスト15分を切ったころに起きた。画面に映し出されていたのは加瀬亮演じる瀬文焚流が、自ら命を絶とうとした犯人に対して異常なまでに激昂する姿。まさに突然の怒り。この直前に部下、そして被疑者と立て続けに自分の目の前で関係者が“死”と向き合ってしまっていた瀬文。“人の死”に強い恐怖心を持つ者だからこそ、命を粗末にしようとした犯人が許せなかったに違いない。

「このエピソードは、彼の裏腹な人格を表しているんですが、実はこの出来事の前と後で、瀬文の人格がまったく変わってしまいます。ある意味、これが今回の作品の最大の特徴なのかもしれないですね」

語るのは本作「SPEC」のメインディレクター・堤幸彦。取り組む作品ごとに自分なりのテーマを掲げて新たな映像表現にチャレンジする、希代の映像作家だ。そんな彼が10年の時を越え、自身の代表作ともいえる「ケイゾク」の続編的作品に挑んでいる。果たして今作では何を考え、何を狙っているのだろうか？

「実は今回はありません（笑）。抽象的でも作品によっては拠りどころがあるんですが、今回はプロデューサーの植田さんがちゃんと最後まで話してくれない（苦笑）。ただ、狙いないことが自分の中では、実は一番スリリングで面白かったりする。だからいつも台本が届くたびにまず謎、謎、謎っていっぱい疑問符が浮かぶので、それをひとつずつ具体的に植田さんに聞くと。最後は人物相関図を毎回書いてるような。だって、これが変わりますからね、たまに（笑）。登場人物のキャラクターがキッチリ固定化されてないんですよ」

そう、瀬文のキャラが変わっていくのは必然だったのだ。最初は石のように固く心を閉ざしていた。警視庁特殊部隊（SIT）の元凄腕隊長という以外、その素性や過去は不明だった。そんな瀬文とコンビを組む当麻紗綾も……。

「私はW短気キャラと呼んでますが（笑）、５話を境にこの二人の関係性が変わっていきつつあると。捜査のときは高圧的で生真面目、冷静かつドライな印象の瀬文ですが、かつては人間味のあるヤツだったと。かたや当麻のほうはある種、人間味を切り捨てて生きてきましたが、その瀬文によって少しずつ氷解していってますからね」

“５話が前半のヤマ場でした”と堤。まずはそこに向かってキャラクター作りや物語のキーになる伏線を張っていたという。あの二人に、どんな無茶苦茶なキャラクターを演じさせても、段々と落ち着いてきますからね。もう5話あたりではある種完成したような気がします。だから６話以降の展開が、コンサバティブな内容になったとしても、あるいはもっと過激な方向に向かったとしても、どちらでもOKの態勢を５話までの間に作りたかったんです」

tsutsumi yukihiko

実はこの作品、通常のテレビドラマの１話分の撮影日数の倍近い時間をかけて１本分を撮影している。だからこそ、当麻と瀬文のキャラを作り込んで作り込んで作り込んできた。いや、作り込む必要があった。アドリブの数もこれまでの作品以上に膨大だという。

「その場で思いついたことを多々入れつつやっていくというスタイルはやっぱり変わらないですね。逆に戸田さんなら戸田さんで彼女がその場で閃いたことをやってもらっていますが、それはやりすぎだろうと思うこともある。とはいえ、やりすぎって言うワリには、こっちはもっと酷いことさせてますし（笑）」

堤演出の特徴の一つであるアドリブ。ならば堤本人発案の場合でも、演者側から提案してくるものでも、ここまではOK、ここからはNGというような堤なりの判断の基準があるに違いない。

「例えば戸田さんだと、彼女のファンではない、戸田恵梨香が演じている当麻という人物を見ている、ちょっとスケベな男の目線的なことで判断してますね。彼女の場合、あまりにも面白いので、第三者的な判断をしないと、すごくプラスになりすぎちゃう恐れがある。だから全然何もしないでOKっていうときと、けっこうやりましたって彼女は言うんだけど、いやいやこんなんじゃ足りないよねっていうときもある。細かな一挙手一投足でも、当麻がキャリーバックをガラガラ引きずりながら歩くときにね、理想の腰の角度があるんです。その角度が場合によっては、こうでもダメ、こうでもダメっていうすごく微妙なところがありまして。それはもう本人には分からないので、見た私が修正を入れると。だから戸田さん的には何が違うのか、よく分からないってことがしょっちゅうでしょうね」

だが、である。アドリブはあくまでストーリーやキャラクターにアクセントをつけるスパイスのようなもの。本作における堤の真の狙いは“突き進んで行く不気味な世界”なのではないか。金曜夜のゴールデンタイムに放送されるドラマとは思えないほど、この物語の本質は暗く深い闇に覆われている。そこにはホームドラマとは真逆の、何か胸に突き刺さってくる鋭さが確実に、ある。

「１～５話までは最後に命を掛けようと。今まで通りの堤ドラマだよねって思わせて、最後の５分間で全然違う、何かうすら寒いものを感じさせる。じゃあどうなるんだ来週はって思わせる、そういうフォーメーションをまずは作っていこうと」

そして、さらなる飛躍を見せたのが６話以降だ。最後の５分どころではない、まさに全編に渡ってのアクロバティックな展開。警察病院の医師・海野亮太が実はSPECの持ち主だった、津田助広率いる公安部の特殊班はSPEC HOLDERたちを抹殺するために動いていた、そして未詳は津田たちの囮のための部署だった、さらに瀬文と一（ニノマエ）が結託した。な

理想の腰の角度があるんです

tsutsumi

最後が好きなのは「あしたのジョー」かな

らば行き着く先は……。
「最後に当麻と一（ニノマエ）が対決して……と、普通はそう思いますよね。ところが植田さんがなかなか先の展開を教えてくれない（笑）。だから噂に聞いた話ですが、それはあくまで一部分かと。未詳の視点からすると、明らかに敵味方があるワケですが、SPEC HOLDERたちの集団も黙ってはいない感じだし、敵側が一つじゃないっていうところが今後のポイントになりそうですね」
　だが、当麻は確実に因縁と向き合う。それが宿命だからだ。その相手は時を止める究極のSPECの持ち主・一　十一（ニノマエジュウイチ）。この最強の相手に当麻は徒手空拳で戦おうというのか。もしかしたら、最強の敵を前に彼女の秘められたSPECが開花するのでは……？
「当麻のアイテムが気になりますよね（笑）。でも、僕は凡人であってほしいと思っています。凡人だからこそ、普通の人間だからこそ倒せる、みたいな最終的な希望があるのかなと思うんです。ですからそれは僕なりに布石を一つ打ってます、実はね。多分、そういう大きな対決になるであろうと。そのときに凡人が勝つ方法はなんだろうっていうことで、それを映像の中にいちおう入れたんですよ。あとはそれを植田さんが採用するかどうかってところですね」
　それでもあえて聞こうと思う。当麻と一（ニノマエ）との対決。堤マジックが描く、その最後のバトルの映像イメージとは如何に？
「僕が好きなのはやっぱり『あしたのジョー』かな。血まみれになっても、血まみれになっても、でも立ち上がって最後まで絶対に勝てないっていう相手に諦めずに立ち向かっていくあの感じですね」
　さらに堤はこう続けた。“どういうクライマックスになるとしても、何気なく最後終わることはまずないと思うんですよね”と。
「その一方で、モヤモヤしたまま終わるのも、最近のドラマの傾向ではないかなという気は若干します。何らかのスッキリした形の結論は出して欲しいかなと。ただ、植田メソッドで言えば巨大な謎というか、未解決な部分を残して終わるっていうのもありますからね。そこはもう、植田さんの頭の中にしかないんですよ」
　やはりすべては植田プロデューサーの頭の中、ということなのか。だが、その堤幸彦もこんな謎のような言葉を最後に投げかけた。
「例の５話で明かされた当麻の左手の秘密ですが、あれは当麻の回想だったっていうことをお忘れなく」
　あまりにも謎だらけの「SPEC」。それを解き明かしていくのはやはり“堤マジック”という名のSPEC。その結末の先にあるものは希望か、それとも絶望か。パンドラの箱を開くのは、堤幸彦——。

堤幸彦
1955年生まれ。映画、ドラマ、舞台などさまざまなジャンルで活躍。ドラマに「ケイゾク」「トリック」、映画に「20世紀少年」のシリーズなどがある。2011年1月3日、WOWOWスペシャルドラマ「堤幸彦 × 佐野元春 コヨーテ、海へ」が放送される。2011年2月〜の舞台「テンペスト」も手がける。

Review 堤 幸彦 論

Takahiro Tomari : text

不穏な乱調に現れた、知られざるSPECの発露。

「人間の脳は、ふだん１割しか使われていません。残りの９割にどんなスペックが秘められているかは、まだわかっていない」。これは「SPEC」乙の回（第２話）で当麻紗綾（戸田恵梨香）が発したセリフだが、この言葉は、もはや完成したかに見える「映像作家・堤幸彦」の才能にも言えることかもしれない。

99年１月、連続ドラマ「ケイゾク」、スタート。このとき堤幸彦は、極めて「ハイスペック」な監督として我々の前に登場した。特筆すべきは、以下の３つの“性能”を持ち合わせていたことにあるだろう。

１つ目は「映像センス」。当時の日本のテレビドラマや映画にはビジュアルにこだわったものが少なく、若い世代からみると物足りなかった。しかし20代でディレクター・佐藤輝（尾崎豊のミュージックビデオで有名）に憧れ、自身も多くのMVを撮ってきた堤の映像は、スタイリッシュで、ＭＴＶ世代も惹きつけた。

２つ目はドラマを描けたことだ。90年代後半、堤のように映像センスを買われ、テレビドラマや映画に進出した人は多い。しかしＭＶやＣＭ出身の彼らは、長尺のドラマを撮ることに苦心し、成功者は少なかった。その点、堤は映像美とストーリーテリングを両立できていた。80年代に映画デビューし、テレビドラマや舞台等でも演出スキルを磨いてきたからだろう。

スペックの３つ目は「音楽性」だ。映像は、編集のリズムやテンポによって、観やすくもなれば、観にくくもなる。堤のリズムは絶妙だった。他の多くのドラマが演歌や歌謡曲だとしたら、堤のそれは明らかにロック。しかし不親切で観にくいわけではない。自然と物語に引き込む力があった。この「堤リズム」が、その後の「池袋ウエストゲートパーク」「トリック」といった作品で世に浸透したのが、2000年代である。

そして2010年、「ケイゾク」の続編的作品「SPEC」が登場。本作でも持ち前の映像センスは冴え、随所に“絵になる”シーンが盛り込まれている。またサスペンスドラマとしての面白さや、画面に潜ませたユーモアなども健在だ。馴れ親しんだ堤ワールド……と、ある安心感を持って観ていたが、戊の回（第５話）で、違和感を覚えた。中盤のこんなシーンだ。

夜、当麻と瀬文が高架下を歩く。「幸福なんて、砂の城よりもろく儚い」という当麻のセリフから回想が始まり、プロポーズされた幸福な記憶が甦る。しかし一転、腕に傷を負った悪夢がよぎり、回想明けには当麻と瀬文の関係性に大きな変化が起こる……。

この一連のシーンには、これまでとは異なる「堤リズム」があった。いつもなら歯切れ良く切り替わるカットが、音もなく不安定にすり替わっていく感じ。不穏な乱調。最後に正面からじっくり捕らえた、戸田恵梨香の艶めかしい表情も忘れられない。振り返るとそこは、ドラマ全体が転調する重要なシーンだ。それを絶妙な温度感と深度で描き、このドラマでも最も印象的なシーンのひとつに仕上げている。

瀬文を演じる加瀬亮は、戊の回の収録中に「ちょっと難しいな」「何かリズムが作れないんだよね」と漏らす堤の声を聞いたという。もしかするとこのシーンがまさに苦悩の箇所だったのかもしれないが、私はそこに、堤幸彦のスペックの残り９割を、強く感じた。

福田沙紀
fukudasaki/shimuramirei
志村美鈴

ものに触れるとヴィジョンが飛び込んでくるサイコメトリー能力をもつ女。
見守り続けて、目覚めた兄を、また失ってしまった今、
最終話へ向けて、果たして、どんな役割を演じていくのか。

Hideyuki Suto : photo　Evi Fujii : styling　Saori Kosaka : hair-make

9話で大変なことになる、って言われてます!

Junya Uesugi : text

「9話で美鈴ちゃん、大変なことになるよってスタッフの人に言われて……。8話でお兄ちゃんがああなっちゃったのに、これ以上、何？　って」

志村美鈴……いや、福田沙紀は驚きを隠せないでいた。植物状態だった兄・優作がSPECによって奇跡的に目覚めた、その直後の死。ケンカしたことをひとこと兄に謝りたかった美鈴にとってはまさに天国から地獄。

「だからこそ、伝えたいことは伝えられるときに伝えなきゃ……っていう強い思いが視聴者にも伝わったのかなと。でも、惨いですよね」

唯一の家族である兄を亡くした美鈴。そんな彼女の兄がわりになれるのは、優作の上司だった瀬文のみ。瀬文が兄を誤射したと思い、彼を恨み続けていた。だが、彼女自らが持つSPECで、その誤解は解けたのでは……。

「恨んでましたよね。でも7話で瀬文さんが銀だこ持ってきて話しかけてる姿を見て、何か瀬文さんの想いも分かったし、でもその想いを分かったところでお兄ちゃんが戻ってくるワケでもない。分かってしまうと許すことになってしまうんじゃないか的な、もどかしさもあったと思うんです。ようやく8話で“そうだったんだ！”って気づきましたけど、だからといって“瀬文さんのせいじゃない”って思えるほどの精神状態ではなかったと思いますよ。兄を尊厳死させる決断を下したばかりでしたからね」

一つ、気になることがある。それはSPEC HOLDERの抹殺を狙う公安零課・津田助広の存在だ。正体がバレたが最後、美鈴も例外ではないだろう。福田が聞いた“9話で美鈴が大変なことになる”とはこのことなのか……？

「それは考えたこともなかったです。要は津田さんたちがSPECを持ってる人たちを抹殺する理由ですよね。結局、犯罪に利用されるのを防ぐためなんでしょうけど、別に美鈴は何にも歯向かってないので、多分、大丈夫だと思います……って、それで殺されたらもう、切なすぎますよ（笑）」

だからこそ、美鈴のピンチを瀬文が救うのではないか。救えなかった兄の代わりに……。福田沙紀が今後の展開を予想する。

「それは……お兄ちゃんが死んでしまった今、どうなるんだろうっていうのが今の正直な感想で……ただ、美鈴って、モノと会話出来ますよね。だからひょっとするとお兄ちゃんの死体と会話するかもしれません。モノが伝えようとしていることは見えるコなので、そこで会話して言えなかった“ゴメンね”を言うのかなと。やっぱりこの能力を持っているからこその謝り方ですよね。そうだったらとっても美しいじゃないですか」

実は最初に福田は美鈴についてこう述べている。“サイコメトリー能力を持っていることを除けば、このドラマの登場人物の中でまともな人間側にいる1人、普通の女の子です”と。そして“SPECの持ち主はその能力のせいで、何が平凡な幸せなのかもう分からなくなってる”とも。その中でまだ普通の感覚を持っている唯一の存在・志村美鈴。福田沙紀は美鈴の今後を懸念する。SPECの持ち主だからこその平凡な人生を——。

福田沙紀
1990年、熊本県生まれ。第10回全日本国民的美少女コンテストで演技部門賞を受賞。ドラマ、映画、舞台、CMなどで活躍中。映画の出演作に「櫻の園」「ヤッターマン」がある。2011年1月スタートの深夜ドラマ「カルテット」（TBS系）に出演。歌手としても活動しており、12月8日、最新シングル「Snow Rain」が発売される。

衣装協力
フリッジネックウォーマー ¥7,245
ギャザーワイドシャツ ¥6,195
（共に、OSMOSIS ／ OSMOSIS ラフォーレ原宿店 tel.03-5474-0030）
シャーリングパンツ ¥8,295
（loaf ／ loaf 新宿ミロード店 tel.03-3349-5647）
リボンチェーンネックレス ¥5,250
（Honey mi Honey ／ Honey mi Honey tel.03-6427-4272）
ハートリング ¥12,600
（Jupiter ／ Jupiter 代官山店 tel.03-5428-2815）

城田 優

shirotayu/chiisatoshi

地居 聖

当麻紗綾の元彼氏。ふたりの恋のエピソードは5話でも流された。
そして、いま、もっともよくわからない存在でもある。
7話あたりから、何かありそう、という描写も出てきたが果たして。

Hideyuki Suto : photo Harumi Fukuda : styling Emi Iwata : hair-make

大どんでん返しで、一歩先を行ってほしいですね。

Junya Uesugi : text

「8話までで出番は、ほぼ1シーン、多くて2シーンですからね。しかも、この先の展開がどうなるか、スタッフもまったく教えてくれないんですよ」

地居聖……いや、城田優はこう苦笑した。未詳、SPEC HOLDER、そして公安の特務班零課。今やこの3者が入り乱れる対決が繰り広げられようとする中で、唯一“蚊帳の外だ”とでも言いたげなその表情。演じるのは東大理学部の研究室に所属する当麻の元彼氏。そして予備校で物理の講師のバイトをしている……という以外、取り立てて特徴のない普通の青年だ。

「地居という男を語る上で分かりやすいのは、当麻と付き合っていたという事実でしょう。IQが200以上ある、ちょっと変わり者の女性と付き合える男性っていうところがまず第1のポイント。しかも彼は結婚するつもりだった。多少感覚がズレている部分があるのかなと。ただ、これは自分の勝手な想像ですけど、地居も相当IQが高い。当麻には及ばないものの、180、190近くはあるんじゃないかと。相当頭がキレる男だと思います」

第2のポイントはその性格だ。落ち着いていて、基本、感情的になることがない。意外と抜けていて、他人のことを気にしていない感じも、ある。

「同じセリフを言うにしても、冷たいのではなく、無頓着な感じ。当麻に対してもあまり感情だったり、ラブな感じを出さないですし。唯一、自殺サークルに彼女が登録するっていうときだけですね、感情を出したのは」

普通にすっと現れて、すっといなくなる感がある。だが、そんな存在感の薄い男がようやく物語の表舞台に登場しそうな気配が。それは第7話の終盤。志村美鈴の描いた絵の中に1枚“それ”があるのを発見した地居は、気づかれることなくそれを抜き取るのである。そして、そのときの顔――。

「ものすごく悪人顔だし、眼も怪しかったしって（笑）。ホント、先のストーリーをまったく聞かされてないこともあって、ボクも地居のあの行動は謎で……（苦笑）。でも、自分もそうですけど、あのシーンを見た人は誰もが普通に“あっ、地居怪しい！”って絶対思うでしょうね」

何やら風雲急を告げる男の周辺。しかし、この段階で地居を怪しく見せるということは、ミステリー的には“ブラフ”の可能性が高いのだが……。

「それか、大どんでん返しですね。今の段階で地居＝悪人？　という仮説が成り立ちますが、さらにその1段上を行ってほしい。たとえば“単なる悪でした”じゃなくて、“救いようのないくらいの悪人だった”とか。もしくは“悪だと見せかけて本当はすべてを守るためにしてました”とか。“絶対地居が怪しいよ”って思っている視聴者が、“うわっ！ あっ！ えっ？ 地居って、そうだったの!?”ってなるぐらいに。……って、言ってる側から9話であっさりと決着ついちゃう可能性もありますけど（笑）」

実は最初に城田は地居について端的にこう述べている。“謎です”と。依然、秘密のベールに包まれている男。果たして彼の役回りは？　城田優が抱き続ける困惑を解き放つのは、やはり『SPEC』の持つSPEC――。

城田優
1985年、東京生まれ。ドラマ出演作に「ハケンの品格」「花ざかりの君たちへ〜イケメン♂パラダイス」「ROOKIES」「天地人」、映画出演作に「ヒートアイランド」「今度は愛妻家」「交渉人 THE MOVIE」がある。本年は、ミュージカル「エリザベート」に出演した。

衣装協力
Y's／ワイズ

賛もあれば、否もある。驚きがあれば、戸惑いもある。
見る人の数だけ「SPEC」の世界がある。それが、「SPEC」の凄さ。

11人のウォッチャーがみた SPEC

宇野常寛 批評家

空虚さから過剰へ、たった十年で反転した世界

『SPEC』を見ていると『ケイゾク』と同じくらい、いや、それ以上に『TRICK』のことを思い出してしまう。『TRICK』はその名の通り「偽者」をめぐる物語だった。それがウソでもでたらめでも構わない、何かにすがらなければ生きていけない。そんな私たちの姿を〈笑い〉という武器を用い自在に距離を調節しながら描き出していた。あれから十年経って私たちの前に現れた『SPEC』は、またしてもその名の通り「本物」をめぐる物語になっていた。ここで描かれているのは、私たちの想像力を超えた身も蓋もない現実にいかに対峙するのかという問いだ。あの頃、私たちはそれが偽者であったとしても「何か」が欲しかった。しかし現在は本物が圧倒的な密度と速度で世界に溢れかえっていて、その過剰さがときに人々を戸惑わせる。たった十年で、世界は反転してしまったのか、とすら思えてしまう。その結果インチキ霊媒師は実在の超能力者に変貌し、夢を売るマジシャンは夢を守る警察官になった。何もない〈廃墟〉から溢れかえる〈ネットワーク〉へ——空虚さから過剰へ、世界は反転したのだ。

もはや問題は何を手に入れるかではない。既に手にしているものをいかに扱うか、それだけだ。この過剰さを、神ならぬ身体をもった人間には過剰な「SPEC」を彼らがいかに処理していくのか——毎週金曜日の夜に、私はそんなことを考えている。

Tsunehiro Uno
批評誌「PLANETS」編集長。著書に『ゼロ年代の想像力』(早川書房)。近刊に『リトル・ピープルの時代(仮)』(幻冬舎)など。

亀和田武 コラムニスト／作家

凛凛しく美しい戸田恵梨香に目が釘づけ

かっこいいよなあ、戸田恵梨香。もちろん坊主頭で寡黙、身体能力は抜群の加瀬亮も文句なしで、この最強コンビあっての『SPEC』だが、どうしても目は戸田恵梨香が扮する当麻紗綾に釘づけだ。

就活で女子大生が着るようなダッサイ服着て、茹でミソ餃子をペロリと何人前も平らげる大食いのシーンさえもが絵になる。しかし第5話の冒頭、戦場さながらに破壊された〈ミショウ〉の部屋で呆然と立ち尽くす瀬文焚流（加瀬亮）を尻目に、気絶から目を覚ますと大アクビをかましてから、ペットボトルのフタを口で外すと、一気に水をグビグビグビィと呑み干す当麻はかっこよかった。「なんでそんなに落ち着いてんだ？　オマエ、何か知ってんじゃねえか」。コーフンする瀬文に「あたしたち……気をつけないと消されるかも知れませんなあ」。ゆっくり呟くシーンに、マジで心を持っていかれた。左腕の三角巾の謎も、この回でわかった。三角巾に秘められた凄惨な過去にも涙ひとつ見せず、邪悪な敵と闘う姿は、まるでナウシカやジャンヌ・ダルクのように凛凛しく美しい。

しかし敵は誰だ？　邪に能力を使うスペックか。それとも彼らスペックを捕捉し狩っていく公安警察か。公安も一枚岩ではない。敵の数と生命の危険だけが幾何級数的に増大する。ビーバーのようなかわいい歯をした大食い少女の勇気は世界を救えるのだろうか。

Takeshi Kamewada
「週刊文春」で「テレビ健康診断」を連載中。著書に『人ったらし』『どうして僕はきょうも競馬場に』など

進藤良彦　ライター／ドラマ批評

『SPEC』の着地点は果たして、停滞か、それとも進化か

初めに『ケイゾク2』との報せを聞いた時には、正直「なんで今さら……」と思ったが、いつの間にかその冠も取れた『SPEC』は『ケイゾク』の同工異曲としての趣を残しながらも、まったく別物の味わいを打ち出した挑戦的な企画だった。久々ケレン味全開の堤演出が画面の端々にまで冴えわたり、ここ数年、停滞気味だったTBSドラマにも活を入れる。そのキレまくった演出に、想像をはるかに上回る力演で応える戸田恵梨香の見事な主演女優ぶり。さすがの存在感を見せつける加瀬亮との掛け合いも実に楽しい。

ミステリーとしての“キモ”に当たる謎解きの中核を成すのが“超能力”や“超常現象”であるがゆえの「何でもアリ」感をどう捉えるかは、評価が分かれるところでもあるだろう。しかし、たとえ日常のリアリズムを逸脱しても、『SPEC』というドラマ世界でのリアリズムから外れずにいる限り、ここで構築されている独特の空気感、次々と提示されるサスペンスの緊張感を絶対的に支持したい。

『ケイゾク』から11年。あの頃と変わらぬ面白さにドキドキさせられるのはドラマ好きとしては有難いことだが、同時に、この11年でテレビドラマをめぐる状況は何も進んでいなかったのかとの思いにも捕われる。果たして『SPEC』が浮き彫りにするのはドラマ界の停滞か進化か。その着地点をしかと見届ける。

Yoshihiko Shindo
日本映画とテレビドラマを中心に、雑誌や映像関係のムック本などで取材・執筆活動を行う。『月刊 TVnavi』でコラム「ドラマデイズ」を連載中。

渡辺水央　ライター／漫画評論家

奇跡の行き着く先に待つものは

奇跡を信じているのは、何も瀬文だけじゃない。神の手のSPECを持つ者によって、志村が目を覚ますその瞬間を待つ瀬文の場合、必然としての奇跡をそこで求めているが、視聴者は偶然としての奇跡をいつもどこかで待っている。何か、すごいものを見たい。それを見せてくれるのが、『SPEC』という作品だ。

そもそも超能力をテーマにしたドラマだということ自体、大きく現在のドラマの枠を超えている。当然、そこで描かれるものは通常のドラマにはない、それこそ奇跡のような物語で映像にはなるわけだ。ただ、これは作品によるものなのか、それとも演出によるものなのか、個人的に最も好きな第3話『丙の回』。モニターを見つめて叫ぶ当麻の表情、そしてそのモニターに映し出されたニノマエの邪悪な横顔、さらにそれ以前に林実に見せたニノマエのこの世ならざるほどの美しい目。これは役者たちの演技力も、そして監督を務めた加藤新の演出力も超えた何かで、それすなわち奇跡だろう。『SPEC』ではそんな奇跡が起こる。

ストーリーあわせ、すごいものを見ているというのが多くの視聴者の感想だろう。そのすごいものの行き着く先には、何が待つのか。楽しみでもあれば、怖くもある。多発する連続は、奇跡などではなくなってしまうからだ。しかし物語でも映像でも、ラスト2話は奇跡がほとばしると見た。その衝撃を見届けたい。

Mizuo Watanabe
「このマンガがすごい!」に執筆。著書に『プロジェクトTHE LAST MESSAGE海猿』「『ROOKIES−卒業−』～軌跡完全シナリオ&ドキュメントブック」など。

高倉文紀　評論家

戸田恵梨香の女優としてのスペックが潜む

堤幸彦がかつててがけた『ケイゾク』では坂本龍一が作曲した主題歌を中谷美紀が歌ったが、今回の『SPEC』では、テクノユニット・相対性理論とのコラボレーションでも注目を集めた電子音楽家の渋谷慶一郎（坂本と同じく、東京藝大作曲家卒）が音楽を担当。静かに降り注ぐ、音の微粒子が、心地良い。

その電子のリズムの中で、爽やかさと力強さを抑制しながら、個性的な演技を見せる戸田恵梨香が、印象的だ。役作りの手法として、演じる役柄にクセをつけると彼女自身が語っていたことがあるが、今回の役は、手に包帯を巻いているという、目立ちすぎる外見上の特徴を最初から付帯している。その上にどんなクセを加えるかと見ていたら、第1話冒頭に、頭だけを突き出して雑な挨拶をする場面が二度ほど出てきて、今回はこれか……。と思ったら、その後はやらなくなって、しかし、奇妙な人を印象付けるには充分だった。

戸田は、作品ごとに大きく違った人物になっていく「役作り派」の女優として知られる。だが、今回は、ひとつの役柄を演じながら、いくつもの表情を見せる。『SPEC』は、堤幸彦・加藤新らディレクター陣の演出アイディアが圧縮陳列のようにちりばめられた作品だが、同時に、戸田恵梨香が演技の引き出しをランダムに開けたり閉めたりしていて、女優としてのスペック（特殊能力）が潜んでいるドラマでもある。

Fumitoshi Takakura
女優評論と映像演出評論を展開。スカパー!・エンタ371で放送中の『高倉文紀と日向千歩のGirls News Actress』でMCを担当している。

飛多あゆこ　コラムニスト

特殊能力ものドラマの理想的な実現

『ケイゾク』の放送から11年たつが、多くの後発ドラマに中に、そのさまざまな影響をみて、何度も作品の世界の深さを思い出してきたせいか、時の流れをあまり感じないほど、今もその印象は鮮やかだ。

天才だが変人の女刑事とたたき上げの男性刑事のツンデレコンビの面白さは、『SPEC』では演じる戸田恵梨香と加瀬亮の個性で微妙に味わいが違うのも面白いが、その珍妙なやりとりのユーモアから謎のラスボスとの悲劇的な闘いに向う怒涛の展開、それを独特の色彩で見せる堤演出は『ケイゾク』ファンを裏切らない。

そして今回は『SPEC』のタイトル通り、時間を止める、超人的な運動能力持つ、病を処方する……などの特殊能力を秘めた人々を巡る闘いだ。"SPEC"物は、全米でもTVドラマ『HEROES』で高い人気を呼んでいて、いつか日本でもやってほしいと思っていたが、それが『ケイゾク』のスタッフで実現したのは、理想的なことだと。11年前の『ケイゾク』の魅力が、警察内部と刑事ドラマの中に、あり得ないような非日常的な世界を見ることにあったのなら、『SPEC』はまさに、その延長にある。その荒唐無稽な人の能力、普通では見ることのできない世界を、このチームが、どんな映像と演出、どれほどの緊迫感と抒情性で見せてくれるのか。それは、これから10年たっても昨日のことにように思い出せる作品になると確信している。

Ayuko Hida
「TVステーション」で「ドラマバイリンガル」を連載。'10年秋クールはドラマが豊作だが、中でも『SPEC』は、1、2番目にスキなドラマ。

北川昌弘　美女、美少女&ドラマウォッチャー

彼らは超能力者たちに勝利できるのか?

『金田一少年の事件簿』から『ケイゾク』『IWPG』『TRICK』など、堤幸彦ワールドを楽しませてもらった者としては、今回の『SPEC』も十分楽しい。『ケイゾク』で中谷美紀が演じた柴田純を継承する、戸田恵梨香演じる当麻紗綾の個性的なキャラがとにかく魅力的だし、『ケイゾク』では高校生だった野々村光太郎係長の恋人が、ピチピチ婦人警官になっているところとか、うらやましいというか、文句なしです。

で、問題はなぜ、超能力者たちなのか。それももしかしたらあるかもしれない範囲ならまだしも。実際、予知能力は、インチキかもしれないと思いながらも見れるし。憑依も、女托鉢僧は妙に気になったし。そんなに簡単に憑依できるなら、なぜ、未詳のメンバーに憑依しないのかなあとか思いながら見れたわけですが。

弾丸をUターンさせたり、時間を止めたりされては、やはり現実からの逸脱としか思えない。そのへんが、一般の視聴者を無視気味に思えて、プライムタイムのテレビドラマとしては残念な気がしてしまう。

インチキ超能力者あたりから徐々に実際の超能力者へ持っていけば、まだスムーズに思うのですが。なんか、後半に向かって、だんだん超能力者バトルになってしまうのではないかと心配です。逆に、ラストで、そんな凄い超能力者たちに、未詳が説得力があるように勝利できたら、それはそれで見事ではありますが。

Masahiro Kitagawa
『ザ・テレビジョン』"ドラマアカデミー賞"審査員。『月刊少年チャンピオン』『BREAKMax』『モバイルFRIDAY』などで執筆。

樋口尚文　映画評論家

制作側のスペックをあえて封印して欲しかった!

『SPEC』を最初に観た時に『ケイゾク』と『TRICK』と『QUIZ』を足してシャッフルしたようなパクリ感あふるるドラマだなあと思ったが、それもそのはず、これはそれらのプロデュース、脚本、演出にかかわったメインスタッフが集まっての新作なのだった。だから、これはパクリではないのだが、いわばセルフパクリドラマ（あえてセルフリメイクとは言わない）という印象である。というのも、TBSにこんなタイプのドラマは珍しいなあというインパクトはあった『ケイゾク』から早くも11年、植田博樹プロデューサーも西荻弓絵脚本も堤幸彦演出も「あい変らず」だなと微笑ましく思う半面、「あい変わらず」過ぎるのだ。だから、戸田恵梨香に加瀬亮というかなり魅力的なコンビをキャスティングしても、何やら設定や展開に既視感漂い続けてしまう。『ケイゾク』ではまだ新鮮だったドラマとバラエティの境界をうろつくようなコメディ演出もさすがに食傷気味で、逆にもの凄くオーソドックスに捜査過程を追う場面などの方がぐんと引き込まれる。劇中のスペックホルダーリスト（一瞬登場）によれば「自動筆記能力を持つ」西荻弓絵に「出血する能力を持つ」堤幸彦と、かなり異色の特殊能力を持つスタッフが集うドラマながら、今回は『ケイゾク』で発揮した企画演出スペックを全て封印して真逆のオーソドキシーで勝負してほしかった！

Naofumi Higuchi
おもな著書に「ロマンポルノと実録やくざ映画」、「『砂の器』と『日本沈没』 70年代日本の超大作映画」ほか多数。

斉藤守彦　映画ジャーナリスト／アナリスト

光っち、怪しすぎ!?

ずっと気になっているのは、光っちこと野々村光太郎係長の存在である。

『ケイゾク』に続いて竜雷太が演じている光っちは、これまた『ケイゾク』に続いて、若すぎる愛人・雅ちゃんに結婚を迫られる日々（『ケイゾク』の雅ちゃんと『SPEC』の雅ちゃんは、別キャラらしいが）。さらに今回の光っちときたら、『ケイゾク』の時以上にダジャレやギャグに磨きをかけ、その瞬間冷凍度は、ニノマエの時間制止能力以上とか←ウソ。ところが、突如として別人のように、カッコよく決めてくれるのが『SPEC』の光っちで、いきり立つ若い刑事の抜いた拳銃を、自分の眉間に押しつけ「そのへんにしておけ、若造」と睨みをきかせたり、当麻と瀬文に、例の名台詞「心臓が息の根を止めるまで、真実を求めてひた走れ」と刑事魂を伝授する、その二枚目ぶりは、雅ちゃんとラブサインを交換して、でれでれしている光っちとは思えない。

カッコいい時の光っちは、植田プロデューサーが10年前に制作した『QUIZ』の竜さん＝クールで不気味な警視庁捜査一課の蓮見管理官が憑依していて、雅ちゃんとパフェを頬張る光っちが、野々村なのだろうか。ちなみに、『QUIZ』の真犯人は少年少女たちで、そのリーダー・生を演じていたのは、幼き日の神木隆之介クンであった……。

Morihiko Saito
著書に『日本映画、崩壊―邦画バブルはこうして終わる』『映画館の入場料金は、なぜ1800円なのか』などがある。

笠部　轍　編集者

獰猛なる世界が、ただ、そこにあるだけ

あえて今さらながら「エヴァ」との比較において考えてみたい。旧「エヴァ」と「ケイゾク」は、膨大なサンプリングの上に作られた物語にいかにコミットメントするかが時代だった。そこには、解釈があり、見る側の気持ちがあった。

「エヴァ新劇場版」の「破」を見たとき、それまでのコミットメントが許されないと感じた。そこでは、ただ、ひたすらに庵野秀明が作り出す世界に翻弄されるしかない。「ＳＰＥＣ」もそうだ。それを、ひと言で表すならば“獰猛”という言葉がいちばん近いように思う。

脊髄反射すら許されない。脳と身体をまるごともっていかれるような感覚。

植田博樹が敬愛する押井守は次のように言う。「世界観とは、その人が世界をどう見ているか」だと。当たり前のように聞こえる。しかし、世にあふれた世界観の多くは、他人からの借り物だったり、マーケティングだったり、パッチワークされた世界観にすぎない。

「ＳＰＥＣ」で描かれている世界は、植田博樹が見ている世界だ、と私は想う。私たちは、「ＳＰＥＣ」というドラマをパースペクティブに、植田博樹が見た世界を見ているだけだ。その獰猛さに翻弄され続けるしかない。嫌なら降りればいい。私は最後まで見る。それだけだ。

Tetsu Kasabe
「ケイゾク／雑誌」などの編集に関わる。「東京カレンダー」に寄稿。

上杉純也　ライター

選ばれた人間ゆえの哀しみ、それを受け止めるふたり

明治時代末期に御船千鶴子という女性がいた。直後に長尾郁子という女性が現れた。ともに“千里眼”の持ち主として、当時、大いに騒がれた。彼女たちは実験の結果、その能力がペテンだとされ、世間から大バッシングを受けたのち、非業の死を遂げた――。

常識の枠からはみ出たものが非難されるのは世の常だが、誰でも一度は超能力を持ちたいと願うものだ。だが、人のためになるならまだしも、悪用されることもある。さらにユダヤの陰謀ではないが、世界の歴史を陰で操る組織があるとすれば、超能力者は絶好の宝物である。多くの才能を手中に出来れば、その能力によって世界の勢力図をたやすく書き換えられるからだ。

その一方で、彼らの存在を、現在の法治国家は想定していない。本編6話、海野医師はこう嘆く。「我々は、マイノリティだ。体制による暴力には能力で対抗する」。さらに本編7話、占い師・冷泉俊明が偽らざる本音を吐露する。「この才能を持っている限り、自由に生きてはいけない」。選ばれた人間の哀しみだ。

だが、そんな彼らを当麻と瀬文は真正面から受け止める。二人は彼らの能力を認めたうえで、そのSPECに対抗すべく捜査し、罪は罪と断じる。それは、古い価値観に縛られない、若いがゆえの自由な発想。そう、歴史の積み重ねではなく、真っ白な状態から生まれた価値観こそが、唯一無二の真実を紡いでいくのだ。

Junya Uesugi
テレビウォッチャーとして『月刊アサヒ芸能エンタメ』や『フラッシュ』『フライデー』『東京カレンダー』などに執筆。週刊誌にコメントを求められることも。

雅ちゃんの素顔 有村架純

arimurakasumi/
masakimiyabi

「SPEC」の中で、何かほっとさせてくれる存在である雅ちゃん。
ここでは、有村架純として、素顔を見せてもらいました。素敵です!

Yoshihisa Marutani : photo Yoshie Inoue : styling Takehisa Uemura : hair-make

「ちょっと大人になった気がしました」と笑顔をみせてこの撮影の感想を語った、少女。改めて自分自身と向き合うことが出来たとでもいうように――。有村架純、17 歳。今年デビューしたばかりの新人女優だ。そんな彼女が演じるのは警視庁に務める 20 歳の婦警。未詳の野々村係長と密かに付き合っている役だが……。

「8 話を見ると、捜査一課の猪俣刑事と婚約しちゃってる感じですよね。でも、あれは野々村さんの気を引くためにやってるのかもって（笑）。結局、あの二人の仲って、なんかずるずるずるずる行って、ずっと恋人同士なのかなって想像してます。決着つかないまんまで（笑）」

女優を志したのは中 3 のとき。ドラマを見て、〝私ならこう演じる〟と自然に考えていた自分に気づいた、という。

「そのころよく見ていたのは、同年代の女優さんにすごく興味があったので、志田未来さんや成海璃子さん、福田麻由子さんが出ているドラマ。必ず見てました」

こうして憧れの彼女たちと同じ土俵に立った。だが、ブラウン管の向こう側とこちら側では想像以上の違いが、ある。

「その役柄の気持ちを理解するとか、感情の入れ方とか、やっぱり難しいです。日常生活の動きでも演技になると出来なかったりしますし。悔しい思いもたくさんしました。いっぱい泣いたこともあります。でも私、負けず嫌いなので、〝いつか見てろよ～～〟って（笑）。落ち込むときはとことん落ち込みますが、次の日にはケロっとするんですよ。切り替えが早い、前に前に進みたいって気持ちが強いタイプですね、私って」

だからなのだろう、目標とする女優は事務所の先輩でもある戸田恵梨香。そして篠原涼子の名も。納得、である。

「お二人ともカッコよくて、サバサバしていてクールで、同性から支持されてるじゃないですか。大人になったらそういう女性になりたいなって」

最後に、今欲しい SPEC を聞いてみると〝周りの人を笑顔に出来るような、太陽みたいな SPEC がいいな〟と笑う。有村架純の女優人生はまだ始まったばかり。無限の可能性を秘めている。だからこそ、やはりこの言葉を贈ろうと思う。〝輝く未来に、はりきってどうぞ〟――。

有村架純

1993年、兵庫県出身。注目の若手女優。「ハガネの女」（テレビ朝日系）などに出演。2011年カレンダー（トライエックス）が好評発売中。2011年初夏公開の映画「阪急電車」に出演が決定。

Director's File

kato
arata

加藤　新

第3話　丙の回　漂泊の憑依者
第7話　庚の回　覚吾知真

Mizuo Watanabe : text Koichi Kuroda : photo

　3話で触れられた、病を取り除くSPECをめぐるやりとり。世のドラマファンは、思わずそのキーワードにニヤリとさせられたに違いない。滝沢秀明が、あらゆる病やケガを治す"神の手"を持つ男を演じた「オルトロスの犬」。偶然にも、このドラマも加藤新の演出によるものだ。
「それを狙って、僕に演出させたわけじゃないとは思いますが、セリフからして"神の手"ですからね（笑）。3話は、いろいろネタがあるんですよ。海野が話す"神の手"。あれは最初、嘘なんだって植田さんは言ってたんです。だから安田（顕）さんにもそう説明していたんですが、どうやら嘘だっていうのが嘘だったみたいで、結果として安田さんに嘘をついてしまって。本当のことをいえないまま、クランクアップされてしまったのが心残りですね(笑)。その持ち主とされる女子高生は、その後また登場すると聞いてたから、顔がわからないように撮ってたんですよ。それでキャスティングが正式に決まってからMA（音声編集）で声を入れようと思ってたら、今度は"神の手"はひとりじゃないと。結局、女子高生の声は、スタッフのなかで一番声が若そうなAPの前田菜穂がやってます（笑）」
　偶然も2回以上重なれば、必然となる。必然としての3話と7話。
「奇しくも両話とも、SPECホルダーを未詳のふたりがちゃんと捕まえる話なんですよね。それはまさに僕がやりたかったこと。最初、『SPEC』の企画書をいただいたときに、特殊能力を持つ人たちを捕まえるということは、今までの刑事ドラマと何がどう違うんだろうと考えたんです。犯人が捕まって罪を認めたとしても、SPECがある以上、なんとでもなってしまう。そこに当麻と瀬文がどう立ち向かって、逆転していくのか。推理よりも、捕まったあとの攻防が『SPEC』というものなのかなと、僕は思ったんですよ。3話はまさにそういう話だったので、面白かったですね。あと、その先の物語としてやってみたかったのが、犯罪者や敵としてのSPECホルダーとは違う、欲しくもない能力を持ってしまったSPECホルダーたちの哀しみ。冷泉や海野ですよね。その人たちの心情をお客さんにもわかって欲しかったしし、当麻にも反映させて表現してあげたいとい

Director's File

今井夏木

第4話　丁の回　希死念慮の饗宴
第8話　辛の回　魑魅魍魎

Toji Aida : text　Kenta Yoshizawa,Koichi Kuroda : photo

植田博樹と共にプロデュースを務める今井夏木は、同時に第4、8話を演出するディレクターだ。ここがスタッフワークとしての「SPEC」の特異点でもある。

「自分が演出やらせてもらうようになって2本目が「ケイゾク」でした。TBS外部の堤（幸彦）さんチームというものすごいものに（キャリアの）かなりの初期に出逢って洗礼を受けたということが、自分のアイデンティティになっている。その血を受けたからこそ、いまの私がある、という自負もある。『ケイゾク』以後、堤さんと何本か一緒にやらせてもらったんですけど、堤さんから影響を受けて心酔した反動で、堤さんとは違うことをやらなきゃ意味がない、絶対違うものにしてやる、と意識していたときもあった。そういう時期を経て、『ケイゾク』の血を受け継ぎ、『ケイゾク』を超えようとする『SPEC』にプロデューサーかつディレクターとして関わったときに、ある意味、自分というものだけに向かっていてもしょうがないというか。伝説となった『ケイゾク』を、次の伝説にするために『SPEC』をやらないと。やるからには、と考えたら、自分なんてものは必要なくなる。自分というものを意識していないですね」

4話の突き抜けた明瞭さ、明快さは、『SPEC』全話のなかでも突出したものになるだろう。それはエアポケットであり、トランジットである。すこぶる風通しのいい空間が、自由を浮かび上がらせる。

「4話は、「SPEC」第1章のラストなんですね。これからダークサイドに突入するその前だった。だから、とにかくいちばん明るくするというのは、全体の流れのなかでも間違いのない位置づけでした。そのなかでも大事なのが、主役の当麻と瀬文の関係性。関係性もいちばんやわらかく明るくいける。振り幅で言えば、最も陽の部分。いかにふたりが馬鹿なことをするか。いかにふたりが馴染めるか。あのふたりが深まることができる回だったんですよね」

神棚の落下、開かない蔵を前にした瀬文の頑張りぶりなど、解放感ある描写が際立つ。つまり、それは『SPEC』の明るい部分との「お別れ」も

imai
natsuki

ここまできたらやるしかない、それだけです。

意味していた。一方、終盤の画面の暗さも挑発的で、ある意味、観る側のSPECを開発するような側面を感じる。

「本当は、もっと真っ暗にしたかった。ご家庭ご家庭でモニターの明るさは違うので、正直、あれが限界かな、ということではあるんですけど。あの回のなかで当麻のいちばんいい顔を、ベストな暗さで見せたかったんです」

暗さのなかで人間の視神経は集中する。つまり見えないものを見ようとするのだ。そして、8話。全11話だった『ケイゾク』で9話「過去は未来に復讐する」を演出し、堤幸彦によるラスト2話へつないだ今井夏木は、ここでも堤演出のラスト2話につなげる役割を担っている。

「最終回に向かって、どこまで深化していくのか。『夕鶴』の鶴のように自分の羽根を紡いできたものに、どう落とし前つけるのか。そこはずっと見えなかったところなんです。本当にみんなで苦しんで、身を削るようにして生まれた脚本。そのホンに負けないように撮らなければいけない。ここまできたら、やるしかない。それだけですよ。なかなか感情が見えなかった瀬文の感情がふれる回。しっかり瀬文を見せたかった」

『SPEC』の存在は、この時代の必然性であり、この時代への抵抗でもある。いまに抗うことこそが現代性だと感じさせる何かがある。

「とにかく見やすいものがもてはやされているなかで、おこがましいですけど、『見る力』をつけてほしいと思うんです。好きになって、とは思わない。ただ、こういうものは、見やすくない、つまらない、と言う前に、そこに何かひっかかってもらいたいと思います。お互いに高め合っていきたいんですよ。視聴者のみなさんも、作っている私たちも。だから、『SPEC』は反発ではなく、お互い深まっていこうよ、という声。ものを作る歓びを『ケイゾク』で知ってしまったひとりとして、11年前のあの高揚感を、11年後のいまも感じている。『感じる力』があれば、観ているひともそれを感じないわけはないと思うんです。お互い育っていきたい。そして、自分たちがいいと思って作っているものでなければ、出す意味もない。いま、本当にそれが出来ているからこそ、ものすごい怖さとものすごい幸福感が両方ありますね」

感じる力。それこそが私たちのSPECであるはずなのだ。

今井夏木
TBSドラマ制作部ディレクター。「SPEC」では、プロデューサーも務める。主な演出作品に「ケイゾク」「QUIZ」「Love Story」「ヤンキー母校に帰る」「特上カバチ！」などがある。07年、映画「恋空」を初監督。08年、ドラマ版の演出も手がけた。

Director's File

kaneko
fuminori

金子文紀

第6話　己の回　病の処方箋

Toji Aida : text Koichi Kuroda : photo

達観の演出。そう呼んで差し支えないだろう。金子文紀の６話は、高度な洗練によって、超然とした視野を獲得している。視点ではない。ヴィジョンではなく、エリアそのものが目の前に広がる。それは「在るものは在る」という認識の開示でもある。

「この作品の本質的な部分は何なのか。そのことを一回しか撮らない僕がやる。しかもこの６話だけ、という。大丈夫なのか？　この回撮って？　と思いながら始めてましたね」

どこまで、何を、匂わせるのか。ニュアンスのサジ加減に、ミスリードの塩梅。わからないまま撮ることは不可能だった。金子は徹底的に植田博樹に疑問点をぶつけた。

「最初、台本を読んだときは度肝を抜かれました。この国の治安、秩序を守っている警察、国家権力をすべて敵に回してしまう気がして、この回やったら、国家転覆罪で捕まっちゃうんじゃないかなと（笑）。見えない敵＝公安について、ここでは犯罪者とみなされる海野が言っている。野々村さんも『魑魅魍魎ども』と言っている。相当これは危険な回だなと。闘う覚悟はあるんですか？　と植田さんに訊いたくらい（笑）。これは観ようによっては『賭け』にもとれるセンセーショナルな話なんです。どのくらい覚悟を持ってやるべきなんですか？　僕はそう訊いたし、そのことについて考えざるをえなかったですね」

植田の答えの詳細をここでは書かずにおこう。ただひとつ、次のことは記しておかねばなるまい。

「これは挑発や煽動ではない。ただ、『与えられたもの』だけを鵜呑みに信じて、正しい／正しくないと思うのはどうなのか」

金子は、この命題を、具体的な演出で捉え、提示してみせる。

「海野の発言が、狂人の戯言のようにも映るように、シーンを一部を入れ替えました。ご覧になった方はわかると思いますが、作品の後味感を考慮した上です。その方が、海野が言ったことは重く深く残るはずですから」

金子演出は決して目に見えてアクロバティックなわけではない。むしろ冷静で慎重だ。だからこそ「効く」のである。我々のまなざしを鍛え、覚

kaneko
fuminori

何が正しいのか、ものを疑う目を耳をもつということ。

醒させていく「目に見えない力」が備わっている。
「海野は6話の犯人だけど、悪い人でも、良い人でもない、どっちでもない部分、そこが切ないわけで。それをわかりやすく片付けてしまいたくなかった。そのリアリティを必死で追い求めましたね」
ど真ん中を明確に描くこと。金子演出に我々が震えるのは、その確信からまったく逃げていないからである。
「ど真ん中でいくしかない、ということですよね。あとあと振り返ったとき、これは本当だったんだと思える芝居にしておかなければいけない。いまわからなくても、あとで『ああ、そうだったんだ』と思えるように。そこだけは肝に銘じてやりました」
だからこそブレはない。性急にもならないし、もったいぶることもない。時間差で届くことを信じている。
「わかりやすくしない。単色に染めない。全部を抱え持ったとき、それはどうなるんですか？ という問いですよね。観るひとは、いったい、何を面白がるのか。それは最後に音楽をつけるまで迷いました。この回は、いわゆる謎解きモノではないですからね。この回で何を伝えたいか？ 本質は何か？ を考えたとき、今まで『SPEC』のノリ、テイストとは相反する局面がでてくる」
ギミックもフェイクもギャグも。すべてが一掃された6回。では金子にとって本作の本質とは何なのか。
「ものを疑う目や耳を持つ、ということだと思います。本当に正しいことって何なのか？ 僕は『真実』という言葉が嫌いなんです。『事実』が真実にすりかえられた瞬間、それは眉唾ものになる。そんなことを中学生の頃思っていたけど、久しぶりに思い出しましたね。事実はひとつしかない。なのに裁判で使われる『本当の真実』って何なんだ？ って。真実は、物事を感じるフィルターが一個入った上でのものだと思う。事実を、ある誰かが見たときに感じたことが真実なんじゃないか。そうすると、人によってそれぞれ真実は変わっちゃうような気がして。歪める意志がなくても、見る人によって真実は違うものになる」
『SPEC』は、事実と真実の果てしない闘いなのかもしれない。

金子文紀
ＴＢＳ制作制作局ドラマ制作センター・ディレクター。主な演出作品に「ケイゾク」「池袋ウエストゲートパーク」「タイガー＆ドラゴン」「流星の絆」など。ＴＶシリーズを手がけた「木更津キャッツアイ」の映画版「日本シリーズ」で初監督、2作目の「ワールドシリーズ」も演出。ほかの映画作品に「大奥」がある。

当麻紗綾×瀬文焚流
かけあい名台詞

当麻「うーん」
瀬文「いったい何が起こってるんだ。ここは警察だぞ」
当麻「（水をごくごく飲む）プハー」
瀬文「何でそんなに落ち着いてんだ。お前、何か知ってんじゃないか」
当麻「あたしは何もしりませんよ。ただ……」
瀬文「……」
当麻「あたしたち、気をつけないと消されるかも知れませんなあ」

当麻「失ってしまったものに想いをはせても仕方ないです。
あたしたち刑事が守るべきは他人の幸せです。
今回は、たぶん里中さん家族の幸せです」
瀬文「それは、俺が守る。当麻……」
当麻「はい」
瀬文「何か、少しでもいい方法があったら……
何でもいいから教えてくれ」
当麻「……」
瀬文「頼む。この通りだ」
当麻「私情は禁物っす」
瀬文「……」
当麻「でも、……はい!」

瀬文「……当麻」
当麻「はい」
瀬文「死は常にそこにある。里中先輩の死は、罪に見合った罰だ」
当麻「……」
瀬文「ただし、里中先輩の妻や娘に罪はない」
当麻「……」
瀬文「俺は、命をかけても、ふたりの幸せは守る。
梨花ちゃんの命を必ず救う」
当麻「私情は禁物です」
瀬文「……」
当麻「でも……はい」

瀬文「わかって言ってんだろうな」
当麻「うっせえ。隠蔽野郎は黙ってろ」
瀬文「何だと。魚(サカナ)顔のくせに」
当麻「そのあだ名、誰に聞いたんだよ?」
瀬文「誰にも聞いてねーよ。てか、サカナ顔ってあだ名だったんだ。
チョー受ける。サカナちゃん、サカナちゃん」
当麻「(カチーン)」

当麻「今突っ込んでも絶対勝てねえんだよ」
瀬文「だったらどうするつもりだ。説明しろ」
当麻「言わねえよ」
瀬文「人の命がかかってんだ。言え!」
当麻「あんたにあたしのプランをじゃべって、そのスカスカの脳ミソから
奪還プランがサトられたらどうすんだよ、ハゲ。
志村さん、助けたいんだろ!」
瀬文「……ハゲじゃねえ。ちょっと頭冷やしてくる」

瀬文「『命捨てます』。これが俺たちSITの誓いの言葉だ」
当麻「命なめんな。何がSITだ、いつまでも。」
瀬文「何だと」
当麻「あんたは未詳の人間じゃねえのかよ。
だったらあんたを心配してるあたし達は何なんだよ」
瀬文「……」
当麻「さりげなく、何度も命を救ってもらった。その事も私、ちゃんと判ってます」
瀬文「……」
当麻「だから、ひとりで、勝手にどんどん行かないでくださいよ。
私や、係長を、時には、頼ってください」

瀬文「電話切るな」
当麻「電話切るな」
瀬文「切ってねえよ」
当麻「切ってねえ」
瀬文「おまえ、アレだな。すんげえ性格悪いし、相当ブスだし、全身ニンニク臭えし……」
当麻「……」
瀬文「何かあったら必ず連絡する。だから、お前はお前の事件を追え」
当麻「……」
瀬文「お前こそ何かあったら連絡しろ。すぐ駆けつける」
当麻「はい」

THE RICECOOKERS

最近のドラマでは考えられない大抜擢。毎回変わるアレンジ。
その存在自体が事件であるバンドの貴重なインタビューをおくる。

Kenta Yoshizawa : photo　Junya Uesugi : text

「NAMInoYUKUSAKI」
から「波のゆくさき」へ
主題歌を歌うは、彼らだ。

バークリー音楽大学に通っていた4人の日本人で結成されたバンドである。2007年には世界的な音楽コンテスト"EMERGENZA"に出場。マサチューセッツ州の決勝まで進出し、日本人バンド初のファイナリストになるほどの実力派だ。満を持してアメリカから逆輸入されたTHE RICECOOKERSとは——。

●　●

——最初にバンド結成のいきさつを。
廣石友海　まず、リードギターの恒太とベースの大祐が日本の音楽専門学校で出会ってたんです。その次にバークリーで僕と恒太が知り合いになったんですね。
若林大祐　その後に僕が恒太を追っかけてバークリーに来たんです。で、みんなロック好きだから"バンドをやろう"と。
藤井恒太　それが2004年のことで……。
大山草平　僕はバンド結成直後にサブメンバーのような形でドラムを手伝ってました。そこから入ったり、入らなかったりが続いて、4、5年前に正式なメンバーになりました。
——バンド名の由来なんですが、日本人の魂みたいなものが感じられますよね。
廣石　いちおう、僕たちの理屈でいうと炊飯器、炊飯器'Sみたいな感じ。これに決まった理由はアメリカで肩身が狭いっていうワケじゃないんですけど、アメリカで、しかも日本人だけでロックバンドをやっていく中でインパクトが必要かなと。日本人で"米"関係の単語を使ったグループ名がついていたら、絶対に忘れられないだろうと。
藤井　ホント、最初に名前を言ったときはみんな笑ってますからね。それか引かれるか（笑）。でも、どっちにしてもお客さんは絶対一発目で覚えてくれて。
——堤幸彦監督との出会いが今回、主題歌に起用されたきっかけだと伺いまし

た。
廣石　前回ツアーで日本に来たときに、ホントーに偶然、堤監督がライブを見に来てくれて、それでバンド自体をすごく気に入ってくださったんです。その流れで今回の主題歌に起用された『NAMInoYUKUSAKI』を聞いてもらったんですね。
――ちなみに、堤さんの印象って？
大山　すごくオーラのある人。最初お会いしたときはいい意味で“変わった人”。“何か”持ってる人だなって。
若林　ロックを心から愛されてるっていうのはもちろんなんですが、とにかく面白い。例えばボクらと交わす挨拶でも必ず何かジョークをかますんですよ。『さまぁ～ずの大竹です』みたいな（笑）。ユーモアに溢れている印象があります。
――今回はその堤さんのアイディアで毎回曲のアレンジを変えてますが、6話以降から英語の歌詞が日本語になったことにとにかく驚かされました。
藤井　タイトルも『NAMI ～』から『波のゆくさき』に変わりましたし（笑）。まっ、日本語の曲も前からありましたが。
廣石　6話以降の曲調ですが、基本、1～5話までのものです。1話と6話、2話と7話、3話と8話が対応しています。ただ、9話は5話と同じロックバージョンなんですね。で、10話なんですが……これが一番のお楽しみですね（笑）。
――今後の活動のバランスを教えてください。アメリカに軸足を置いてということなんでしょうけど。
廣石　バランス的にはやっぱり、向こうがベースになりますね。そこからフィフティフィフティの割合が出来ればなと。
若林　まぁ、みんなニューヨークに住んでいますけど、たとえば札幌に住んでいて、東京に来て何かやるっていうぐらいと同じ感覚ではいますよ。
――最後に、日本のファンに向けてメッセージをお願いします。
若林　他の曲も聞いてほしいですね。
藤井　次に来日したときに、ぜひライブに来てください。
廣石　ニューヨークでぜひお会いしましょう！
大山　まずは見た目から入ってもらって、曲がよければ、ぜひ長いおつきあいを……って、女性ファン限定ですが(笑)。

THE RICECOOKERS
2004年にボストンで結成された。バークレー音楽大学に通っていた廣石友海（ボーカル／ギター）、藤井恒太（リードギター）、若林大祐（ベース）でバンド結成し、のちに大山章平（ドラムス）が加わる。2010年1月にリリースしたマキシシングル「Four of Our Songs」が、12月1日からiTunes Store でも購入できるようになった。主題歌「波のゆくさき」はTBSメロディにて配信中。主題歌の全10バージョンを収めたアルバム「“NAMInoYUKUSAKI”~TV SPECial COLLECTION」が12月22日にリリースされる。堤幸彦監督がプロデュースしたミュージックビデオがDVDとしてつく、CD+DVDの2枚組となる。

THE RICECOOKERS LIVE
12/04（土）大阪・心斎橋
AtlantiQs
12/05（日）山口・周南
rise SHUNAN
12/07（火）石川・金沢
MANIER
12/08（水）愛知・名古屋
ell. SIZE
12/12（日）東京・西麻布
Sweet Emotion
12/14 (火) 東京・渋谷
CHELSEA HOTEL
12/15 (水) 東京・渋谷
La.mama

当麻の部屋

Koichi Kuroda : photo

当麻紗綾が愛したもの。

【シュレーディンガーの猫】

当麻紗綾、ドラマ「SPEC」の最初のセリフを覚えているだろうか。餃子をバクつく姿が印象に残っている、あるいは、やりかけのパズルを見て「ワンピース足りない」というセリフが記憶に残っている人も多いと思われる。が、その前の一言が、「シュレディンガーの猫、うける」である。シュレーディンガーはオーストリアの波動力学を構築した物理学者。「シュレーディンガーの猫」とは、ある思考実験で、詳しくははぶくが、ある実験系で猫が生きている状態と死んでいる状態が50%ずつの状態を表す。人は、猫が生きている状態と、死んでいる状態というふたつの状態を認識することはできるが、このような重なり合った状態を認識することはない。これをシュレーディンガーはパラドックスと呼んだ。これが、後の「SPEC」のドラマの道筋を指し示しているなどという野暮なことは言わない。内部の設定資料においては、当麻紗綾は、「理系オタク。シュレーディンガーのブロマイドとウチワを所有（ジャニーズとシュレーディンガーは彼女にとって同じ）」とある。

（右ページの数式は、たぶん、シュレーディンガーとは、関係ありません）

神木隆之介

kamikiryunosuke/ninomaejuichi

一　十一

1話から圧倒的なSPECを見せ、見るものを惹きつけて止まない
一(ニノマエ)という存在。5話で明かされた当麻との因縁。
「SPEC」は、ふたりをめぐる対決の物語なのだろうか。

Kenta Yoshizawa : photo　Tsuyoshi Takahashi : styling　Masako Shibuya : hair-make

“美しく無邪気に”がテーマ。でも、それだけではないようですね。

Mizuo Watanabe : text

「うちの母親が『SPEC』の僕を見て、『なんか戸田恵梨香さんと雰囲気が似てるね』って言ってたんですよ。母親は本当にいち視聴者で、仕事のことやドラマの内容も詳しく知らないんですけど、『姉弟役もいけるかもね』なんて話していて。僕自身は自分のことなので、似てるのかどうか全然わからないですね。似てるとしたら、なんだかうれしいです（笑）」

と、笑う神木隆之介。しかし雰囲気こそ似ていても、ニノマエと当麻は敵対する者同士だ。その謎めいた役どころ。彼の知る一十一とは――。

「ニノマエ役に関しては、衣装合わせの段階で堤監督から『神木君のSPECは時を止められるからね。でも詳しく言うと……』っていうことを聞いていたくらいなんですよ。あとは何も知らなくて、話が進むに連れ、一体、どういうポジションなんだろうって。黒幕っぽいけれど、本当に悪い子でもなさそうで。堤監督と前回ご一緒させていただいたときは、『20世紀少年』の“ともだち”役。ただ今回お話をいただいたときは、前回とは結び付けては考えなかったですね。堤監督だからまた怪しい役なんじゃないかっていう予想や固定概念みたいなものは、全然なかったです（笑）。『20世紀少年』に関してはずっとファンで、お話をいただいたらまさかのともだち役だったんです（笑）。でも今回、ニノマエっていう役名を聞いたときに、なんか普通の役とは違うのかなっていう感じはありました」

普通とは違う役どころを、無邪気に楽しんでもいる。「単純に超能力や超常現象は興味あるので、時間を止めるシーンは、心の中で“フフフッ”です。でも現場では迷惑を掛けていて、まわりの人たちは実際止まらないといけないし、ハイスピードカメラの撮影で時間も掛かるので、皆さんから“一緒のシーンになりたくねぇ”って思われてるかもしれない（笑）」。

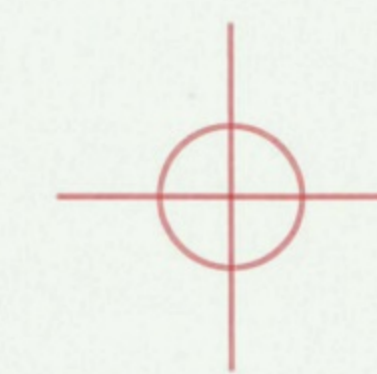
無邪気さはまた、ニノマエという役どころに通じるテーマでもある。

「内面的なことに関して聞いていたのは、外見は高校生だけれど、ある理由からニノマエは心と身体がずれていて、中身は無邪気な小学生なんだっていうこと。そこから発想して、僕としては“美しく無邪気に”ということをテーマに演じてます。ニノマエ自体は、普通の男の子なんじゃないかって思ったんですよ。だからこそ怖いところもある。無邪気っていうことでは、笑い方も気を付けてます。2話の死刑台のところは、あえてちょっと悪びれてるんですよ。でも、3話でカギを見せたときの笑い方は、無邪気さを意識してやってました。ただ話が進むにつれて、やっぱりニノマエはそれだけじゃないのかなと。7話の最後で、当麻にいきなり拳銃を向けられるじゃないですか。そうなったら、普通の男の子は“えっ!?”てなるはずなんですよね。でもニノマエは落ち着いていて、そこでパチンと時間を止める。今まではニノマエの黒い部分と白い部分って二面性だと思ってたんですよ。でも黒いニノマエが通常で、その一面性のなかで普通の男の子を演じてるのかもしれないなって考えるようになってきましたね」

神木隆之介
1993年生まれ。映画、ドラマを中心に活躍中。映画の主な出演作に「妖怪大戦争」「遠くの空に消えた」「Little DJ ～小さな恋の物語～」「20世紀少年　最終章―僕らの旗―」がある。アニメの声の出演も多く「サマーウォーズ」「借りぐらしのアリエッティ」など。

ポスターの話。

「ケイゾク／映画」のポスターは印象に残るものだった。
と思ったら、やはり「SPEC」のポスターもカッコよかった。その裏話。

Junya Uesugi : text

10年前に公開された「ケイゾク／映画」のポスターは「ツイン・ピークス」を思わせるものだった。そこには、ローラ・パーマーの死体のごとく美しく装飾された中谷美紀の姿が。ただ、インパクトでは今回の「SPEC」のポスターも負けてはいない。果たしてそのテーマは？

「テーマは“死体はあそこにある”です。最初は渋谷のスクランブルとかで、眠るようにしている当麻の図を考えていたんですが、うまくいかなくて……。そこで堤さんとウチのポスターのプロデューサーをやってる秋山真人くんの二人から“ゼブラゾーンってどうですか？”と。結果的にお葬式に使う鯨幕のようでもあり、なおかつ上下をずらすことで、非常に目立つ感じになったかなと」

実はこのポスター、沢田研二主演の映画『太陽を盗んだ男』のポスターと非常に似ているのだが……。

「いや、むしろ死体の発想は伊島薫さんの写真集からですね。“女優の死体シリーズ”です」

確かに美しい死体である。

相田冬二　そもそもSPECっていうのは、何なんですかね。人間は悲劇に直面すると、潜在能力が開発されるっていうことなのかもしれないけれど、そもそもどうしてそんな能力を得なきゃいけないんだろうって。
渡辺水央　現状がプラス・マイナスゼロの状態だとしたら、悲劇でマイナスになったぶんの反動で何かが肥大して、爆発するってことなのかもしれないですよね。今のところ、そう見えます。
相田　当麻にしても、腕を失ったぶん、何かを得ているっていうことなのか。当麻の脳が肥大しているのも、つまりは腕がないことの反動だとも取れますよね。
上杉純也　そもそも当麻と瀬文にしても、脳の人の当麻と、身体の人の瀬文っていう図式なんですよね。対象的なふたりがいる。
笠部轍　どこまで植田さんや堤さんが意識しているかはわからないけれど、『SPEC』を見て思うのはまさに身体で、身体的だっていうことなんだよね。食べるとかぶつかるとか、即物的で脊髄反射的な行為がすごくよく出てくる。脳じゃなくて身体で、そこが『ケイゾク』とは違うところ。加瀬君が出てる『アウトレイジ』なんかもそういう作品で、殺人のシーンとかがいたくてリアル。今、クリエイターの人たちは皆、そこを考え始めているのかなって。
渡辺　臭いっていうのはそれこそ身体的ですよね。当

座談会
結局、「SPEC」は何がやりたい

「ケイゾク」がそうであったように、
見た人間の数だけ答えが生まれるのが
「SPEC」の世界。でも、そこには何か
"核"のようなものも感じられる。
4人のウォッチャーの結論は?

Mizuo Watanabe:text

麻は餃子臭いっていう（笑）。臭いは『ケイゾク』でも描かれていたモチーフだけれど、今回はもっと動物的なんですよね。
上杉　その餃子屋の中部日本餃子の親父は、身体的なところの逆をいってるんですよね。今は、ロボットになってる（笑）。あれは、じつはすでにもう保険金殺人で妻に殺されてるっていうことらしくて……。
相田　皆さん、あの餃子屋に関しては、どう見てました？　あそこってすごく意味ありげじゃないですか。堤さんの遊びの部分っていうことなのかもかしれないけれど、『ツインピークス』の"赤い部屋"のような、トランジットの別空間にも見えないこともない。
笠部　確かに死の臭いみたいなものもあって、保険金殺人っていうことでは現代社会の縮図でもある。
上杉　堤さんとしては、店の冷蔵庫を開けたらオヤジの首が入ってるっていうこともやりたかったらしいんですけどね。一体どんな店なんだっていう（笑）。
相田　店自体、この世に存在しないものなんじゃないかっていう見方もできるわけで。そもそも僕は、地居というのは当麻にしか見えない、彼女の脳内だけの人物なんじゃないかと思ってたんですよ（笑）。
渡辺　そういう意味では、死と生、身体と脳の線引きはあいまいなでもあるのかなと。記憶にしても「ケイゾク」的に考えれば、すべては嘘なんだともいえる。

のか？

リアルっていうものはある、ということを描こうとしていると思う　笠部

SPECが存在すること自体、塗り替えられた記憶の幻想なんだって見方もできるんですよね（笑）。だからこそ、身体こそリアルっていう話になのかもしれないけれど、物語の構造としては、SPEC＝身体も、推理＝脳には敵わないっていう話で、脳は身体に勝るんだっていうことにもなってしまって。

上杉　どんなに優れたSPECも、通常の人間である当麻に負けてしまう。それって、リアルがフィクションに勝つっていうことでもあるのかなと。

笠部　僕が思うにこの作品は、いくら嘘で塗り固められようと、リアルっていうものはあるんだっていうことを描こうとしてるんじゃないかとも思うんだよね。瀬文がわかりやすいんだけれど、死ぬであろう人と関係性を作らされて、それがリアルなものとして彼のなかに残っていく。抗い難いリアルなものと、曖昧な記憶っていうものには明らかに差異があって、そこが『ケイゾク』と違うところなんじゃないかと。だからそれも結局、身体に繋がっていくんだよね。『ケイゾク』も『SPEC』も、大きくいったら描いていのたは現代のサバイブの仕方なんだっていう気がするんだよね。ただ、『ケイゾク』はある種、引きこもってOKなんだっていう文脈で、それだとモラトリアムでしかない。でも『SPEC』はそれこそ現実が勝るじゃないけれど、現実のなかで判断して生きていくんだってことを言ってるのかなと。

渡辺　現実を“生きろ”っていうことですよね。そういう意味では、『SPEC』は『もののけ姫』なのかもしれない。腕が切り落とされるっていうモチーフも『もののけ姫』と重なる。あと、ルールなき世界で突出した何かが前面に出てくるっていう意味でも、宮崎駿的ではあるのかなっていう気はしたんですよね。

笠部　あとはやっぱり“エヴァ”（『新世紀エヴァンゲリオン』）だよね。それでいうと、『ケイゾク』はまさに“エヴァ”のＴＶシリーズで、『SPEC』は『エヴァンゲリヲン新劇場版』だと思うんですよ。

上杉　あぁ、旧シリーズに対して、引きこもってOKじゃないっていう意味ではまさにそうですよね。

笠部　あと生理的かどうかっていうことも大きくて、TVシリーズはいろいろ語れたんだけれど、『エヴァンゲリヲン新劇場版：破』を見ると、もう圧倒されるしかない。今の庵野秀明は、メッセージや文脈じゃなくて、表現としてのすごさですべてを見せ切ろうとしてる。同じことを『ケイゾク』に対しての『SPEC』にも感じていて、とにかく圧倒して欲しいなと。

相田　『破』を見たときに、すごく演劇的だなって思ったんですよ。演劇的ってどういうことかといえば、ツバも飛ぶし、汗もかくし、カッコ悪くて恥ずかしいものなんだけれど、映像に比べてはるかにリアルを生

エヴァじゃないけど〝セカイ系〟の小さな話かもしれない
渡辺

公安とか日本の裏側とか大きな物語をやろうとしている
上杉

み出しているっていうこと。『破』にはそれがあって、『SPEC』もそうなんですよね。

笠部　それは植田さんの意志であり、堤さんの意志でもあると思うんだけれど、マーケティングじゃない、自分はこれがやりたいんだっていう個人の意志をすごく感じるんだよね。そういう意味で、すごく情動的だなと。題材にしても、描かれてるものにしても、マーケティング的に作ってるわけじゃなくて、自分たちはこれを見せたいんだっていうものがあるんだよね。

上杉　植田さんに「好き放題やってください」っていったときに、「好き放題やります」っていっていってたんですよ。自分にとっての『SPEC』は、そのひと言に尽きますね。今回、本当に好きな要素を全部入れてる気がする。最初に脚本を読んだときに、これは『ジョジョの奇妙な冒険』だって思ったんですが、実際、植田さんは『ジョジョ』は大好きみたいですから（笑）。

渡辺　SPEC＝スタンドっていうことですね（笑）。

笠部　そういう要素も入れながら、植田さんや堤さんが見た今の社会や世界っていうのもちゃんと反映されていて。個人の意志で作品を作ってるっていうことからして、現代的。それがどう集約されるのか。

上杉　今のところ、最後がどうなるのか、まったく読めないですからね。解決されていない問題が山積みで。当麻とニノマエが戦って終わると思って見ていたら、まだ裏に誰かいそうで……。

相田　きちっとしたオチはなくていいのかもしれないですよね。生きていくっていうことが根底にあるものだとしたら、そこにオチは要らないわけで、何か決断をするっていうことさえあればいい。ここまで見続けてきて、『SPEC』っていうのは閉じない話なんだろうなっていう気がするんですよ。そのなかでどこに着地するのかっていうのは、楽しみですよね。

笠部　どこまでの規模の話なのかっていうのもあるわけですよ。それこそ『破』では世界規模で何か起きてるっていう話になってたけれど、一方で『SPACE BATTLESHIP ヤマト』では世界には日本人しかいないっていう前提で始まってる。じゃあ、SPECホルダーは日本だけなのかっていう（笑）。

渡辺　世界観自体は大きくても、じつはすごく小さな話なのかもしれないですよね。それこそ“エヴァ”じゃないけれど、“セカイ系”の話だとしてもおかしくない。

相田　それは感じますよね。現時点で、敵とされる存在の目的がまったく見えないじゃないですか。最近の作品でいえば、『SP THE MOTION PITURE』が衝撃的だったんだけれど、あの作品も壮大な何かを描きながら、実は堤真一と岡田准一の小さな話ではあるんですよね。『SPEC』もそうなのかなと。

上杉　一方で、公安とか日本の裏側とか大きな物語をやろうとしている感じもありますよね。
笠部　どこまでが本気のメッセージかは最後まで見ないとわからないんだけど、渡辺さんが言った“生きろ！”じゃないけど、現実を“見ろ”という感じはすごくありますよね。
相田　今回、金子（文紀）さんを取材して、そういう感じは確かにあったし、今井（夏木）さんも視聴者が見る力を鍛えてほしい、ということは言ってるよね。「見る」力ということを植田さんが求めていて、それをディレクターたちが無意識に意識しているというか。

閉じない話なんだろうなって気がする。どこに着地するか楽しみ　相田

笠部　マンガやゲームを考えれば、確かに超能力はあって当たり前くらいのものなんだよね。でも、地上波のゴールデンのドラマで超能力をやるっていうのはすごいところで、そこにそれこそ植田さんや堤さんの意志を見てしまうんだけれど、そのなかで最後の２話、何が見られるのか。いってみればここまでが『SPEC』の序章だと思うんですよ。
上杉　爆発的な何かが起きるのかもしれない。期待したいですね。
渡辺　小さい話でも大きい話でもいいから、既製のドラマを超えて圧倒させてくれる何かを見たいし、『SPEC』は見せてくれる作品だと思いますよ。

相田冬二　ライター／ノベライザー
Toji Aida
中山一也著「シロ　腹切り役者は何度でもよみがえる」（幻冬舎）を構成。ノベライザーとしては「黒く濁る村」（ACブックス）を手がけた。現在「男たちの挽歌　A BETTER TOMORROW」を執筆中。

渡辺水央　ライター
Mizuo Watanabe
「このマンガがすごい！」に執筆。著書に「プロジェクト THE LAST MESSAGE 海猿」「ROOKIES－卒業－』～軌跡完全シナリオドキュメントブック」などがある。

上杉純也　ライター
Junya Uesugi
テレビウォッチャーとして「月刊アサヒ芸能エンタメ」や「フラッシュ」「フライデー」「東京カレンダー」などに執筆。週刊誌にコメントを求められることも多い。

笠部轍　編集者
Tetsu Kasabe
「ケイゾク／雑誌」などの編集に関わる。「東京カレンダー」に寄稿。

「ケイゾク」から「SPEC」へ
いま、時は流れ……。

ueda hiroki

植田博樹

取材した皆が言う。「植田プロデューサーに聞いてください」と。
ならば聞こう。ドラマ「SPEC」の創造主に。
「ケイゾク」で、思いもよらぬ場所まで連れて行ってくれた
この男が仕掛ける「SPEC」の結末とは。
私たちは、どこへ連れて行かれようとしているのか。

Kenta Yoshizawa:photo

構成がわかってしまうのが嫌だった

“彼が存在してもしなくても、歴史は何も変わらない。だが、その逆の人間もいる。一人いれば歴史が動くことになる人間が……。そして……誰でも自分が気づかぬ間に、歴史を動かす瞬間に、出会っているかもしれないのだ……”（かわぐちかいじ作「ジパング」第24巻より）

ならば、この男はいったいどちらの人間なのか。TBSのドラマプロデューサー・植田博樹。この「SPEC」の世界を礎から司る創造主である。ミステリードラマの体裁を取りつつも、テーマには超能力や国家権力を取り入れ、さらにゴールデンタイムに放送されるドラマとは思えぬほど、その内容はダーク……。そして謎が謎を呼ぶ展開。この複雑怪奇な「SPEC」の世界で、いったい男は何を描こうというのか？　実は今回、役者、スタッフのそのほとんどが口を揃えてこう言っているのだ。“まったくこの先の展開を聞かされていないんです。だから植田さんに聞いて下さい”と。

「本当に申し訳ないと思いつつも、役者さんたちにはほとんど何も話さずにおこうと。ミステリーって説明するとそれだけでみんな腑に落ちちゃうじゃないですか。実はまだ1、2話を撮ってるときに5話の台本を渡してしまったんですね。当然ですけど、6話以降の流れがなんとなく見えてしまう……。何かね、3、4話撮ってるのにテンションが落ちはしないか、ややもすると消化試合っぽいことになりはしないか……とちょっとだけ危惧しちゃったんです。なので出演者には、6話以降からの先の展開をまったく説明しなかった感じですね。あとは知ると喋っちゃうスタッフがいたので（苦笑）。だから黙っておきたかったっていうのもあります（笑）」

ドラマでミステリーをやる、しかもオリジナルの作品をやる……。これがベストセラー作品の映像化なら、未読の読者に対しては犯人以外の情報を与えても許されるワケだ。だが、オリジナルのミステリーだとその加減がない。見るもの全員が突き詰めて真相を推理していくだろう。必然、ネタがどんどんバレていく。だからこそ植田はその状況を打破しようとしたともいえる。実は本作は当初､5話で第1部完の､全3部構成だったという。

「ミステリーって最終回で、ようやく犯人が出てくるのが定番だから、みんながみんな最終回が見たいと。でも、それがね、自分の中ですごく頭にきてて……。つまり本でも連続ドラマでもあと何ページか、あと何話かって分かった瞬間に、その構成が分かってしまいますよね。それは視聴者にとってはつまらないことなんじゃないかと。だから今回はもう今の段階で、後半はミステリーでいうところのツイスト、ツイストの連続に入ってます」

それはまさに8話だろう。当麻と一（ニノマエ）がついに対峙した、津田率いる公安零課の正体が明かされた､未詳が取り潰された､瀬文が一（ニノマエ）に協力した。そして……。話を一気に広げた、いや広げすぎた感すらある。だがこれも植田にとっては“想定内ですね”と笑う。

「そんなに思いもかけない動きってしてないんですよ、今回は。ラストシー

Junya Uesugi : text

ンが、当麻と一（ニノマエ）の対決のラストシーンが決まっている以上、それはそもそもこういう画が撮りたいというのがあって、そこから全部の世界観を逆算して組み立ててますから。だからそういう意味でいうと、要素としては何も変わってないんですよ。ただ、順番が多少変わったっていうのはあります。細かい部分でいうと、志村をここで消しといたほうがいいのか、生きながらえさせておいたほうがいいのか、とかですね」

話は一気に当麻と一（ニノマエ）との対決シーンへと及んだ。宿命の相手は時間を止める究極のSPECの持ち主。果たして彼女の勝算や如何に？

「時間が止まる作品って、もうホントに何百本何千本とありますが、その中でも漫画『ジョジョの奇妙な冒険』の空条承太郎と DIO との闘いが一つの完成形だと思うんですよ。あの時を止める闘いがシリーズ史上でも最高の闘いで、あれを越えないと、あれと違うものにしないと時を止めるって、やる意味がないと思ったんですね。そんなときに、たまたまあるイギリス映画の恋愛モノを観まして、そのラストで"これだ！"と。ああ、これで当麻と一（ニノマエ）の決着がつけられるとね、一つのオリジナルとして決着つけられるなっていうのが自分の中で見つかったんですよね」

果たして当麻は勝つのか、まさか負けてしまうのか？　勝つならその方法は？　尋ねるが、核心部分のせいか、言葉少なになる。だが、次の瞬間、不意に彼はこんな質問を発した。"いろんな超能力があるとすれば、一番やっかいで、一番恐ろしいと思うSPECって何でしょうね"と。

「10 話でね、ある人物が将棋の例えを出すんですよ。"チェスって一度駒を取ったら２度と盤上には戻せない。日本の将棋だけですよ、取った駒を自分の味方に使えるのは。だからボクは将棋が好きなんだ"って。そういうふうにただ殺す、消すのではなく、自分のいいように便利に使う、自分の手駒にしていくっていうSPECが一番怖いとボクは思うんですよね」

そもそもの疑問がある。それは"なぜ超能力をミステリーの題材に組み込んだのか？"。まさに既成のドラマへの挑戦状とも取れるのだが……。

「犯罪者が超能力を使った場合、当然今の刑法ではなかなか犯罪としては対応しにくいだろうとまず思ったんですが、同時にこれなら今までにないミステリーになるなと。最初にぶつかった壁は、コイツらを何罪でどう警察が逮捕するのかっていうところだったんですが、結局、ぶっ殺すワケにもいかないのなら、そこは超法規的措置——要は公安なんじゃないかと」

ひょうたんから駒ではないが、実は公安という題材を選んだことでもう一つやろうとしていたことが出来たという。それこそが……。

「権力は自分たちに都合のいいように情報を隠蔽しているってことです」

そして出てきたのが津田助広率いる公安零課だった。それも、国家権力を裏で操る秘密組織。すべての物事を司るのだが、決して表に出て来ない、闇の勢力。大義を果たすためには、陰謀を企てることも厭わない……野々

これで決着がつけられると思った

u e d a

「ケイゾク2」という覚悟

村係長のセリフではないがまさにそれは“**魑魅魍魎**”ともいうべき存在。
「それはね、堤さんの影響が大きいですね。堤さんって何かあると“陰謀です”って言うんですが（笑）、例えば、バラク・オバマという何の背景もない人が何故に突然現れて、アメリカの大統領にまでなったのかってことを考えたときに、堤さんが言うワケですよ、“シナリオが決まっていて、そういう流れになってるんです”って。で、失敗したら叩いてさっさと次の人材に交代する……そういうシナリオライターがいると仮定すると、この今の世の中の状況も何となく腑に落ちる部分があるワケです。だから今回はね、敵は確かに出てくるんですが、それは一概に敵とは言えない相手。政治的なこととか価値観に翻弄されていく側の人間、みたいなことを描きたかったっていうのもあるんです」

その翻弄される側の代表が、未詳、そしてSPEC HOLDERたちなのではないか。この2つに加え、SPEC HOLDERたちの抹殺を狙う公安零課と表面上は三つ巴の様相を呈してきた「SPEC」。世界観がダークサイドへと向かいつつあるのは「ケイゾク」と同じだが、繰り広げられる物語、その構造はまったくの“別物”。とはいえ、“何が正しいのか？”“生と死の意味”“家族”そして“血”……etc.。その裏に流れるテーマは何ら「ケイゾク」と変わっていない。いや、むしろあれから10年が経ち、それらのテーマを今の時代に改めて問うような形でブラッシュアップしている。
「そうですね、テーマ的なことは通底してますよね。それは『包帯クラブ』や『自虐の詩』といったステップを踏みながら、この段階に来た感じというか。ただ、多分、観ている人にはパッケージ的には違う風合いのものになってるんじゃないかと。でもそれは、そば屋が作ってるカレーライスみたいなもので、そのそば屋の出汁はずっと通底しているのと同じですよね」

そう、そもそもはこのドラマ、「ケイゾク2」という触れ込みでメディアに紹介された作品だ。だが前作のオリジナルキャストではない。「2」と打つことでバッシングを受けることや、逆風に曝されることは容易に想像がつく。なのに、なぜこのような危険な賭けに出たのだろうか。
「今となってはスピンオフって言ったほうが『ケイゾク』ファンにとっては優しかったのかもしれません。やっぱり自分たちの中にすごい気負いがあったんですね。『ケイゾク』の名前を冠して勝負したいっていう。10年前の自分たちに勝てるのかっていう。だから、『ケイゾク2』っていう肩書きはね、自分たちの覚悟を固めるためには必要だったんじゃないかと」

果たして結果はどう転ぶというのか。それは神のみぞ知ることなのかもしれない。だが、この「SPEC」を「ケイゾク」を越える高みへと導くのは間違いなく植田博樹という創造主が持つSPEC。ただ、その能力は我々観るものを曖昧模糊とした先の見えない暗黒の世界へと誘うことになるかもしれないが……男が最後にSPECを発揮したとき、世界は反転する——。

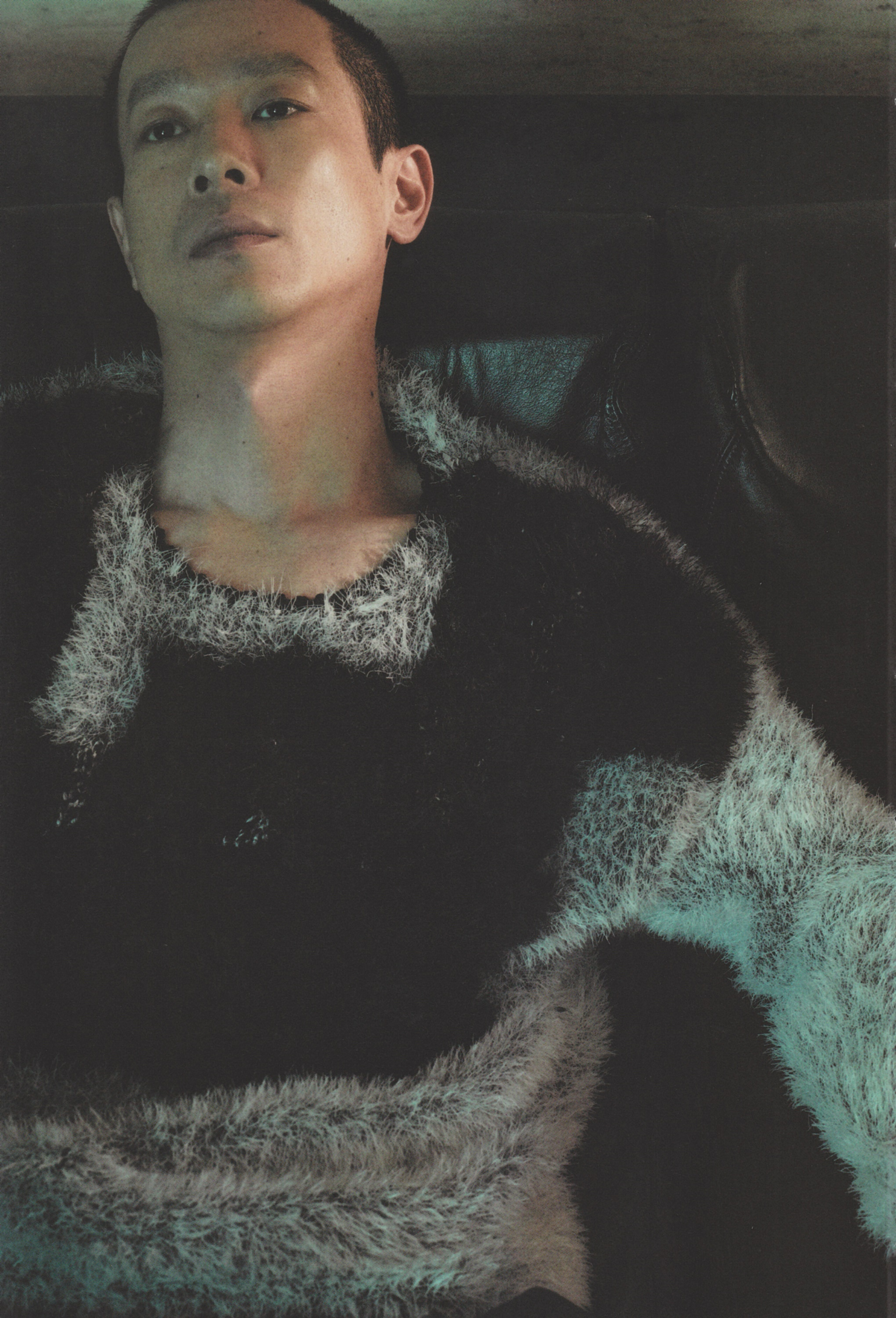
植田博樹
1967年生まれ。ＴＢＳドラマ制作部プロデューサー。代表作に「ケイゾク」「ビューティフルライフ」など。近作に「特上カバチ！！」などがある。映画プロデュース作品に「ケイゾク／映画」「恋愛寫眞」「包帯クラブ」「自虐の詩」。

加瀬 亮

kaseryo/sebumitakeru

瀬文焚流

敬愛する先輩を失い、愛する部下を失い、
いま、“彼”はある決意を胸に戦いの現場へと向かう。
そこには、何が待ち受けているのか。

Yoshihito Sasaguchi : photo Yuta Kaji : styling Yasushi Miyata : hair-make

赤いダルマのように、闇の部分を見てしまった。

Junya Uesugi : text

先輩が、ゆっくりと崩れ落ちていった。彼の目の前で、敬愛する先輩が――。飛び降り、駆け寄る。そして、彼は覚悟を決めた……。

「5話で里中先輩と再会したシーンに垣間見えるんですが、体育会系的なんだけど、でも仲間を信頼し、想い合って……というのが彼本来の姿なんだと思います。でも、志村の事件をきっかけに未詳に左遷されてしまった。そのせいか1人で背負っていた部分があったんです。だから最初は他人に対して頑なに閉じていたり、ガチガチな感じでした。そういう意味でいうと、このドラマの登場人物で一番“青い”んです。里中先輩の死はね、その青くさい男に課せられた、次なる成長への最初のステップだったと思います」

加瀬亮は瀬文焚流の想いをこう推察する。我々の前に姿を現したときの瀬文はすでに軍人気質で、上下関係の規律を徹底的に遵守する、頑固で几帳面な男に過ぎなかった。そんな瀬文の閉ざされた心の扉が、徐々に徐々に解き放たれていった。当麻紗綾という同じドSキャラの変人と時を共有したことで……。

「ずっと事件を解決してきたのは当麻であって、自分じゃないってことは、いくら肉体バカの瀬文でも分かってるワケです。だから5話で、本当に深刻な里中先輩の状況を目の当たりにして頼った。恥ずかしながら、頭を下げて当麻に頼んだんです。その瀬文の気持ちを汲んで当麻もキチンと応えてくれた。かといって、そこから親密な関係にならなかったのが、あの二人らしいなと(笑)。ただ、同時に仲間としての信頼感は、あの段階でもう生まれていました」

反発しながらも、その裏では確固たる絆で結ばれた瀬文と当麻。だが、このコンビに最大の試練が訪れる。第8話。植物状態のまま尊厳死が決まった志村を何とか救いたいという想いから刑事という仕事を裏切る行為に走ったのだ。それは一(ニノマエ)との結託。あれほど組織に縛られていた男が……裏切ったのだ。

「津田の存在を知ったことで、零課の正体を知った。彼が信じていた警察には実は違う一面があったことを目の当たりにして葛藤に陥ってしまった。単純にいい悪いは判断出来ないんですが、津田も零課も瀬文にとって良しとするなら、また違う葛藤になったことでしょう。でも、赤いダルマが並んでいたように、黒い部分、闇の部分を見てしまったワケです。だから思い悩みはしたんだけど、警察を裏切る決意をしたんじゃないかと。あの、青くさかった瀬文がね」

だが、それは私利私欲のための行動に他ならない。まさに先輩である里

同じ方向を見ている、あの感じが好きなんです。

中が歩んだ過ちを選択してしまった、瀬文。そんな彼を助けられるのは彼女しかない。“私情は禁物です”と言いながらも……。

「だけど、お互いの想いは分かってる。これはもう2話から堤監督が考えてきた関係だと思うんですが、象徴的なのが5話のラストの屋上シーンですよね。決して二人を見合わせない、視線は交わさないんですけど、同じ方向を見ている……あの関係が好きなんです」

寄り添うことはないが、互いに裏で信頼し合っている。決してベタつかない関係があの“ドSコンビ”には似つかわしい、と思う。そんな二人の想いを表した、白眉ともいえるシーンが8話にある。携帯電話でのやり取りする場面で当麻は瀬文に叫ぶ。“私や、係長を、時には頼ってください”と。それに対して瀬文は……。

「あの場面なんですが、実は最初に準備稿の台本を頂いた時点では、“これはちょっとベタつくんじゃないかな”と思っていたんです。そして、最終稿では、例の当麻のセリフのあとに電話が1回切れるくだりが入ったんです。それがあってあの二人にはちょうどいいと思いました」

8話のラスト。病を治すSPECによって奇跡的に目覚めた志村。だが、その直後に別のSPECによって、惨殺されてしまう。必然、それを一(ニノマエ)の仕業だと思い込む瀬文。その一(ニノマエ)は当麻の因縁の敵でもある。対決のとき、近し！ そして、その瞬間、秘められていた瀬文のSPECが開花するのか——？

「ボクが瀬文を好きな理由は、SPECを持ってないなかで本人が可能な限り精一杯諦めずに対処しようとするところなんです。あがいてもがいて、何か自分に課している、背負っている感じの部分に非常に好感が持てるんです。だから、瀬文にSPECなんて必要ない」

こう言い切った加瀬。だが、あえて質問を重ねてみた。“二人のうちどちらかが、SPECを持っていないと戦えないのでは？”と。

「力を持っていないことに意味があると思うんですよね。あれだけの能力を持った人たちと渡り合ってきたボクらは、別にSPEC持ってませんっていうところに。もしかしたら、対抗出来ないのかもしれないんですけど、だったらそのまま死んでほしい(笑)」

“この「SPEC」という作品で新しい、今まで立つことのなかった場所に立てたような気がしています”と加瀬は言う。それはまさに必然的な邂逅ではなかったか。「SPEC」の持つSPECによって、俳優・加瀬亮はこれから新たな地平へと雄々しく踏み出していく。

加瀬亮
1974年、横浜生まれ。映画「五条霊戦記」でデビュー。今年の出演作に「アウトレイジ」「マザーウォーター」がある。映画最新作「海炭市叙景」(監督・熊切和喜)が公開中。

ジャケット 82,950円
パンツ 44,100円
(共に BLESS ／ Diptrics
tel.03-3409-0089)
タートル 73,500円
(OKURA　tel.03-3461-8511)
ほかスタイリスト私物
ユーズドのモヘアトップス
8,190円
(TORO　tel.03-3486-8673)
パンツ 42,000円
(BLESS ／ Diptrics
tel.03-3409-0089)

Review 加瀬 亮／瀬文焚流 論

Toji Aida : text

浮遊する魂は、オフの時空でしか生きられない。

来年1月28日に全米公開されるガス・ヴァン・サント監督の「RESTLESS」で、加瀬亮は日本軍人の亡霊を演じているという。もちろん、撮影されたのは「SPEC」以前のことだが、このことは大きな示唆を与える。

加瀬と軍人と言えば、誰もがクリント・イーストウッド監督の「硫黄島からの手紙」を想起するだろう。イーストウッドもまた西部劇であろうと現代劇であろうと、ある種の亡霊を描き続けている映画作家である。

「SPEC」の撮影が始まって間もない頃、加瀬に話を聞いたとき、彼は自身のパブリックイメージの温床であるところの「繊細」という表現にやや苛立っているように見えた。確かに俳優、加瀬亮の魔力を多くのひとびとは「繊細」(その意味に反して何と乱暴な言葉だろう！)の一語で片付けてしまいがちだ。間違いではない。しかし、それ以上に重要なことがある。加瀬は「オフ」を生きている役者なのである。

たとえば「スクラップ・ヘブン」や「重力ピエロ」を観ればわかるように、「オン」を生きるオダギリジョーや岡田将生に対して加瀬は「オフ」の時間と空間にその身を置いている。では、「オフ」の時空とは何か。抽象的な物言いになるが、それは亡霊として存在しつづけることに他ならない。

「SPEC」で瀬文焚流が「命捨てます！」と叫ぶとき、それが彼のよりどころであった「軍」的な組織における了解事項としての忠義や精神性であることは明白だが、「かけられた命」が常に宙づりの状態であることを見逃すべきではない。瀬文は自分が何者であるかわかっていない人物に映る。しかし彼は昨今の若者たちのように自分探しをしたりはしない。いや、自分を探すことを放棄するために「軍」的な環境に身を置いていたように感じられる。

加瀬ならではの夢遊病的な歩行がそのことを後押しする。物語の後半で瀬文は組織から離脱し、文字通り浮遊することになるが、そこでもアイデンティティが模索されることはない。彼は不明のアイデンティティを傍らに置きながら、闘うのである。瀬文がいつも手にしている紙袋はおそらくその証明だ。彼はそこに、彼自身見たこともない「魂」を隠し持ちつづけているのだ。

便宜上定義されているキャラクターではなく、所作や表情から類推される人間の根源的テクスチュアに「触れたくなる」演技を、常に加瀬は見せる。たとえばその姿は、もう「命」のない者が「命」をかけているようにも思える。

自分ではどうすることもできない感情を突発的、偶発的に爆発させた役どころとして忘れられないのが、伊勢谷友介監督の「カクト」である。伊勢谷は加瀬が演じた存在を「天使」と呼んでいた。

浮遊する「魂」は、「オフ」の時空を生きるしかない。だから、せつないのだ。

軍人にせよ、亡霊にせよ、彼らに求められるのは「無私」のたたずまいである。加瀬亮は自己主張から遠く離れて、「無私」のありようを決然と表出させている。

SPEC論FINAL

たったひとつの能力を有効に活用するには、世界は複雑すぎた。

Toji Aida : text

第6回、無人のマンションの部屋に、サイレンの音が重なった瞬間、私はSPECを唯物論的に理解した。理解したというのは正確ではない。どうやら実在しているらしい、という気配を、しかし曖昧にではなく明瞭に、淡くではなく濃密に、ただ感じたのである。把握する能力はないし、またその必要もないと思った。物事を手中におさめるのではなく、あるがままのフォルムを漫然と浴びればそれでいいのではないかと、ぼんやり知覚したのである。

ある容疑者の死を仄めかすあのサイレンは、同時に仕組まれ隠蔽された何かを指し示すサインでもあったはずだ。それは警告というような大仰なものではなく、軽い目配せのようなものである。目的が明確になってはいない、契機そのものが横たわっているような風情がそこにはあった。物語的な必然でもなく、演出上の野心でもなく。非常にぶっきらぼうではあるが、きわめて精度の高いなにものかが、あの音には潜んでいる。

すべての言葉は比喩である。そんな言葉を残したのは、どこの誰だっただろう。思い出せない。思い出せないが、「言葉には素があり、言葉は、言葉の素にかたちを与えただけにすぎない」と言ったのは、糸井重里である。つまり、あらゆる事物、事象はそもそも名前を有していたわけではなく、たまたまそれに「ふさわしい」と思われる呼び名を「あてがわれた」にすぎない。大切なのは、言葉ではない。言葉の向こう側にある素である。言葉から、その素を感じ取ることが、大切なのである。

こうして記してしまうと、随分当たり前のことでしかないような気もするが、こうしたことを、概念ではなく、具体的な現象を享受することによって認識する機会はなかなかなく、糸井の言説を私はついつい忘れがちなのである。だが、そのことを忘れていいと思っているわけではなく、ごく稀に、もののはずみで思い出すこともある。そうしたとき、不確かなのだが、奇妙な懐かしさとともに訪れる「手ごたえのようなもの」がある。そして、私は思うのだ。この瞬間を味わうために、思い出しては忘れる、忘れては思い出すという行為を、無意識に繰り返しているのではないか、と。

こうした書き方は、結論を先延ばしにする、単なる時間稼ぎに思う方も少なくないだろう。だが、いま書かれているこの文章がもし弛緩しているとしたら、それは意図的に選ばれた文体が作用しているからではなく、正直であろうとした結果にすぎず、正直であることがいかに思考をゆっくり運んでいくかという自分なりの発見がトレースされているだけなのだ。

『SPEC』で起こっている出来事は、確かに緊迫している。もはや一歩も退くことのできない時点にまで、事態は進行しているだろう。そう、それが人間にとって、幸か不幸かは関係なく、文明が無慈悲なまでに容赦なく進化するように。

映像の筆致は基本的に引き締まっている。点在するファクターもヴァラエティに富んでいる。ところが、なぜなのか、私は神経を集中させたり、アンテナを張りめぐらせたりするよりも、ただ無為に安堵してしまうのだ。そこでは、何がもたらされているのか。

いくら本題から逃げていると揶揄されようが、あえて明記しておきたい。これから綴られていくことを、どうか鵜呑みにしないでほしい。言葉の意味ではなく、言葉の素を感じてほしい。いや、もっと直裁に言えば、あなたの脳で、私が書き散らかした言葉のようなものたちを、まさぐってほしい。言葉とは、多くの場合、そのひとの身体の残骸である。

人間の進化ということを考えるならば、私たちは類人猿だった時代に戻ることはできない。もはや、いまから、四足歩行のいきものに還ることは、現実的に不可能なのである。振り返ることが必要なときもあるだろう。しかしながら、帰ることは許されていない。立ち止まりながらでもいいから、一歩ずつ、いや半歩ずつでも進んでいくしかないのである。

どのような卵のなかにいるかは定かではないが、私たちは結局のところ自分自身を「孵らせる」ことしかできない。前述したように、それが正しい意味での更新である保障はどこにもない。改悪であったり、退化である場合も、充分ありえる。だが、それをやめるこ

これからも複雑で未熟であろう世界を私たちは生き続ける。

とはできないし、やめるわけにはいかないのである。

かつて、私は超能力者を極端に進化した人間だと考えていた。彼ら、彼女らは、独自に、自分自身の能力を更新してきたのだと。

しかし『SPEC』は、まったく別の思考に導く。

彼ら、彼女らは、進化したのではない。進化をやめたのだ。意識的に。つまり、進化しないという道を、強固に選び取ったのが、超能力者たちなのである。言うなれば、旧人類だ。脳を10%しか使っていない人間が進化して、残りの90%を活用してしまっている人間が進化を止めているというパラドックス。

『SPEC』に登場する超能力者たちが全能の神でないことは明らかである。ある者は私利私欲に走り、ある者は復讐を遂行し、ある者は世間に向かって自己を主張してみたりする。彼らは、間抜けというより、単に幼い。その突出した能力に反比例するかのように、精神年齢はひどく子供じみている。超能力者だから、社会に適応できないのではない。社会に適応することを拒んでいるから、超能力者なのである。すなわち、能力と精神年齢は反比例してるのではなく、実は正比例している。彼ら、彼女らは、能力が突出しているからこそ、幼いのである。

超能力者たちは基本的に、たったひとつの能力だけが突出しているにすぎない。そして悲しいことに、そのたったひとつの能力を有効に活用するには、世界は複雑すぎるのだ。だから、悲劇が起こる。『SPEC』はその悲劇を描いている。

世界は単一に形成されてはいない。つまり、世界は超能力者のたったひとつの能力に対応するわけにはいかないし、対応することはできないのである。たとえば、誰もが千里眼を有しているような世界があるとすれば、おそらくこのような悲劇は起こらない。千里眼を有した私たちは、一定のルールの下、優劣を競い合うだろう。また、いずれの能力が勝っているか否かだけではなく、その能力をいかに世界のために最大限に役立てることができるかについて模索し、それぞれに実践し、それぞれの成果を提示するだろう。もちろん、千里眼を駆使した犯罪行為がなくなることはないだろうが、誰もが千里眼を有しているのだとしたら、そこで誇示されるものは僅かなはずで、多くのひとびとは経済活動や芸術活動に結びつけるはずだ。千里眼をビジネスチャンスとして、あるいはアーティスティックなインスピレーションとして受けとるだろう。その結果、ほとんどの人間は心身ともにアスリート的な人生を送ることになるだろう。生きることがスポーツのようになれば、宗教も薬物もいらなくなるかもしれない。

しかし混沌を失ったその世界ほどつまらない世界はないだろう。悲劇のない世界は絶対につまらない。これは暴言以外のなにものでもないが、平和こそが人間を、人間の能力を堕落させるはずなのだ。

かくして世界は複雑でありつづける。

超能力者たちそれぞれの能力を受け入れることができない世界もまた未熟である。そして、世界が今後、成熟していく見込みはどこにもない。だが、それでも、私たちは生きるのである。

私たちは超能力者ではない。だが、私たちはとるにたらないそれぞれ固有の能力を使って、世界のために何かしようとする。極論を言えば、殺人も暴動も戦争も、それはすべて、世界のために何かしようとした結果だ。確かにそれは間違っている。人を殺めてはいけない。暴力を振るってはいけない。大量殺戮は絶対に許されない。しかし、それでも私たちは、私たちの能力を、行使するべきなのだ。

私たちは世界のために何かをしようとする。世界は私たちのために何もしてはくれないだろう。それでも私たちは世界のために何かをしようとする。

あるひとが『SPEC』を作り、あるひとが『SPEC magazine』を作り、あるひとがそこで書き、あるひとがそれを読む。

世界は単一ではない。私たちも単一ではない。無数の差異に満ちた世界を、無数の差異を抱えた私たちは生きている。そして私たちはSPECを行使する。誰かが死に、誰かが生まれる。それでも人間のSPECはケイゾクする。

心臓が息の根を
止めるまで
真実に向かって
ひた走れ。
それが刑事だ。

餃子女

筋肉バカ

Forever

SPEC magazine 了

SPEC magazine 電子完全版 に 続

編集長　小林淳一

編集補　小西樹里

文　上杉純也

渡辺水央
泊　貴洋
斉藤守彦

相田冬二

撮影　鶴田直樹
笹口悦民

丸谷嘉長
吉澤健太
須藤秀之
藤田政明

黒田光一

企画協力　上杉純也

デザイン　松山裕一 u.d.m.

出版企画　TBSテレビメディアビジネス局ライセンス事業部

thanks to　フラーム
アノレ

オスカープロモーション
ワタナベエンターテインメント
アミューズ

オフィスクレッシェンド

安倍由美
品川裕之

special thanks to　植田博樹
今井夏木
赤羽智比呂（オフィスクレッシェンド）

SPEC magazine

発行人　平澤和夫

編集人　小林淳一

2010年12月 4 日　第1刷発行
2010年12月29日　第3刷発行
定価 1,575円（本体 1,500円＋税）

発行　株式会社ACCESS
〒101-0064　東京都千代田区猿楽町 2-8-16　平田ビル
東京カレンダー編集部
編集　03-5259-3567
販売　03-5259-3675

印刷　大日本印刷株式会社

SPEC magazine

電子完全版

「SPEC」最終回(12月17日放送)の翌日、
2010年12月18日配信予定

電子書籍のみの発売となります。
「SPEC magazine」の内容に
電子版限定のコンテンツを含んだ内容になります。

http://www.tokyo-calendar.tv/spec/